

反障害通信

23. 8. 3

135号

何のための議論か？——運動の前進のための議論を！——

わたしも不条理なことは許せないということの延長線上に、議論の勝ち負けの論理にとられてしまうことがあります。そもそも「勝ち組——負け組」ということの批判から、そして反戦という意味においても、反差別というところにおいても「闘い」ということを忌避するような思いが出てきていて、意味のない「論争」ということも避けようという思いをもつようになってきています。

勿論、わたしがやっている論は反差別論で、差別的論者の論理を受け容れてしまうと、またその論が社会に広まってしまうと、差別ということが広まり、また、現実的にひとが殺されていくという事態さえ生み出してしまいます。そういう意味では「論争」を強いられることも出てきます。ですが、最近の議論を見ていると、そもそもなんのために議論しているのか分からない場面にでくわしています。その話に入る前に、そもそも議論さえ成立していない状況も起きていることを押さえることが必要になります。

安倍政治のもたらした議論不毛の政治

安倍政治のキーワードは本人が自ら口にした、「忖度」政治と「印象操作」政治です。もちろん、「そんなことはしませんよ」とか、相手がしているかのように批判的文脈で使っていたのですが、きちんととらえかえすと、ごまかし政治のために自分がそういう政治的情况を作り出していたと、とらえ返せるのです。そこには議論を積み重ねで、よりよい政治を生み出していくという志向性はありません。「少数意見の尊重と徹底した議論、その上での多数決」という民主主義の原理があるのですが、前者を切り捨てて、数の論理での強行採決という、一方的な意見の押しつけという専制的政治を横行させました。首相自らが、答弁席からヤジを飛ばし印象操作をする、答弁は質問に直接関係のない自分の意見をとうとうと述べ、時間がすぎるのを待って強行採決に至るといったことの繰り返しでした。

そもそも議論にもなっていない流言飛語の類い

その安倍政治の議論不毛の延長線上で、今国会で、LGBTQ+での法案の「審議」をなすと称しつつ、まともに議論さえなされないまま法案がおっていったのですが、そもそも、議論というのは論理でなりたつのですが、論理にもならない非論理的な感情的なことばがあふれてきていました。そのひとつが、トイレや風呂のはなしです。幾重にも誤魔化し、すり替えの話が出てきます。まず、法案が何のための法律かということをおいまいにしていることです。これは、マイノリティの「権利擁護」のための法案だったはずで、それを、マジョリティの「権利擁護」の話にすり替えています。そもそも、LGBTQ+の問題とは別のチカン行為をどう取り締まるかという話です。しかも、想定してるのは、たいていヘテロの男のLGBTQ+を装ったチカン行為とそれに附随する話です。それはLGBTQ+の法律とは関係のないことなのですが、それを危惧するなら、LGBT

Q+を禁止法案にして、そのような偽装の行為はLGBTQ+のひとたちへの差別をもたらすとして加算罰に処すとか、付帯決議でチカン行為の取り締まりの法整備をなすという文言を差し込めば済む話です。更にいうと、最近マスコミはマスコミの報道が何をもたらすかということで、すごく敏感になっていて、例えば自死の報道をするときには、かならずそこから後追い自死が起きないように、「命の電話」のような相談窓口を案内するようになっていきます。そもそも、かの装いチカン行為の話を持ち出すこと自体が、チカン行為を誘発するとは考えないのでしょうか？ 繰り返し誤解のないように書きますが、このチカン行為をするひとたちは、たいていLGBTQ+を装ったヘテロの男のチカン行為です。

わたしは、このような話が出てくるに及んで、関東大震災の時の流言飛語で、朝鮮のひとたち、中国のひとたち、そしてろう者が殺された話を想起していました（註1）。このような流言飛語のようなことは到底許されないし、そんなことを流すひとたちにきちんと責任をとらせることだと思っています。

さて、ここまでは、差別する側のひとたちへの批判です。

何のための議論か？

ですが、最近の議論を見ていると、一応社会の矛盾を指摘して、それを解消・解決する方向で運動しているひとたちの間で、何のために議論しているのかが分からないような議論も起きています。そもそも、日本の文化というのでしょうか？ 「暗黙の了解」のような話があります。たとえば、2015年の安全保障法関連が通り、ひどい選挙区制度の中で野党共闘の必要性が語られ、その中で、現実的ということ、野党共闘が成立しました。その中で、暗黙の了解のようなこととして、公の場で野党内批判をしないということが出ています。勿論、内内の話としては、批判がなされ、酒の場とか友人の間での議論は当然なされています。公の場ということ。色んな政党への批判があり、過去から続く議論としては一部引き続き展開していますが、新しい方針の問題としてはほとんど公的に出してません。また、新しい政党には、どうも論理破綻しているという思いがあっても、公的などころではそのような発言・批判はしていません。それはかなり徹底していることです。今日、野党といっても、与党と同じところでの批判はあって、さらにファシズム的な危機を感じる維新への批判にはわたしも踏み込んでいますが、その他の野党への批判、野党内批判はほとんど出していません。

そもそも野党共闘の是非の議論も出て来ています。ですが、まだその「暗黙の了解」は続いて行くと言えらると思います。

ところが、その暗黙の了解のようなことが崩れている事態が起きています。反原発運動の中での、CO₂ 温暖化説への批判です。そもそも「科学的な議論」として、色んな議論が出てくることを止めることではないし、むしろ活発に議論し、そのことを踏まえて、方向性を出していくということが当然の道筋です。そして、誤った情報にもとづき運動を進めていくと消耗していくことになります。そういう意味で、決着がつくなら着けてもらえればと思います。が、どうも簡単に決着が着きそうにないのです。

運動の前進のための議論を！

ではどうすればいいのか？ そもそも何のために議論をしているのかのとらえ返しが必要になります。すでに書いているように、議論の決着がつけられればそれがよいのですが、

どうもそうはならない様相です。そもそも、専門性のあるひとたちでの議論にならざるをえないことなので、そこでの議論の設定と決着を求めることになるのですが、自分が専門家として議論をしているのか、専門家のひとたちで議論をしているのを、それなりに専門性を検証する立場で議論に参画しているのか、立場があいまいなまま意見を言っていることがあり、議論が錯乱しているのです（註2）。

さて、もう一つの問題があります。それは運動的な立場で何のために議論をするのかというところから返してです。専門家のひとたちは必ずしも、運動的観点があるわけではなく、それで生活しているところで、自分と自分の理論への評価というところで、自分の理論の正当性を主張することに生活がかかっているということがあります。学的な立場での権威ということもあるかもしれませんが（わたしはそういう権威ということへは反差別論をやっていることで批判的です）。

問題は、運動をやっているひとたちが運動の論理から離れて、それらの混乱に巻き込まれてしまうことです。

そもそも、反原発の運動にとって、CO₂ 温暖化説の批判をすることが何の意味があるのでしょうか？

わたしは反原発の運動は、反-環境破壊-運動の中に位置づけられ（それだけでなく反核というところから反戦という位置づけもつのですが）、その反-環境破壊-運動の盛り上がりは、CO₂ 温暖化説による気候変動をもたらす環境破壊への反対運動として展開されています。とりわけ、若いひとたちが取り組んでいて、若いひとたちへの政治への関心の広がりや参画、深化という意味ももっています。反原発運動は自分たちが原発建設を許してしまったところからの責任ということでしょうか、中高年のひとたちが多く、それに対して、若いひとたちが集まっている気候変動問題へのとりくみに、わたしは大きな期待を抱いています。

そもそも、この巻頭言は読書メモと映像鑑賞メモとリンクしていくのですが、運動的観点があったから CO₂ 温暖化説批判は控えるということがあったようですのに、何を今更、批判を表舞台に乗せるのでしょうか？ どうもウクライナ戦争で、エネルギー問題が起きていて、原子力エネルギーへ回帰する動きが出ていることがあるようなのです。ドイツで、原発を使い続けようとか再稼働させようという意見が出ていたようなのですが、現実にはドイツは全原発の停止に踏み込みました。現実的に大きな舵をきったのが日本だけのようです。いくつもの非論理性がかさなっていくのです（註2）。そもそも、気候変動で反-環境破壊-運動をやっているひとたちが、原発を使おうと言い始めているのではなく、企業や政治家の動きにすぎないことだったのではないかと思うのですが、なぜ、反原発運動内部から CO₂ 温暖化説批判が起きてくるのか意味が分からないのです。

運動的観点から議論をしているひとは、改めて、何のために議論をするのかを、何が自分たちの運動の前進に繋がるのかを押さえる中で、とらえ返すことなのだと思います。

（註）

1 実は、朝鮮人・中国人だけでなく、ここで書いているようにろう者も殺されたという話があります。さらに四国の香川から千葉に来ていた行商人の集団も犠牲になったという

ことがあり、「福田村事件」として記されていて、こんどそれが森監督の映画になったようです。9月に封切りされるそうです。

2 まず、①専門家として発言しているのか、それなりに学習をしている運動家として発言しているのかを曖昧にしています。前者ならば、きちんと、専門家として批判にとりくむことです。批判者はちゃんとノーベル賞受賞者の真鍋淑郎さんの名を自ら出しています。次に②ノーベル賞批判という印象操作をして、その批判をネグっていることです。更に、③自然エネルギーということでもいろいろ問題点も指摘されているという課題があることをもって、その批判することで印象操作して、化石燃料か原子力エネルギーかという二分法にしてしまっています。④原発回帰の動きは企業と政府の動きで起きていることで、反環境破壊運動のCO₂温暖化反対の運動をしているひとたちが原発推進の運動に転じているわけではありません。そういう中で、気候変動での運動家や理論家の批判を、しかも罵倒的にする意味があるのでしょうか？⑤そもそも、「環境問題」といわれることは、人間の自然の征服という科学信奉から起きてきていること、という知見が出ているのに、科学批判に反批判の科学賛美の論理さえ突き出してきています。今日、ワクチンの副反応とか、遺伝子操作などのバイオテクノロジーの問題など、いろんな問題が出て来ています。反原発運動での科学賛美など、ありえるのでしょうか？

(み)

(「反差別原論」への断章) (64) としても)

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

- ◆「反障害通信 135 号」アップ(23/8/3)
- ◆メインの「反障害——反差別研究会」のホームページに不備・加筆することがあり、昨年かなり大幅な更新をしました。「今後の課題」など関心をもってもらえる方は、読んでもらえるとう幸いです。<http://www.taica.info/kaikadai2.pdf>
- ◆「反差別資料室 A」「反差別資料室 C」で見れなかったところをチェックして一部修正して再アップしました。今のところ、全部見れるようになっています。
- ◆「反差別資料室 C」の「文献室」も、新しい本の購入や読書に合わせて、3月の末に二年ぶりにリアップしました。

読書メモ

今回は、地球温暖化論をめぐる意見の対立を読みとく学習です。巻頭言と映像鑑賞メモと連動しています。気象学とか地球物理学まで進みえないので、アウトラインを押さえるだけなのですが。

・船瀬俊介『温暖化の衝撃』三一書房 1997

この本は、わたしが反原発運動に関わって、反原発運動の中で、なぜか地球温暖化説批判が起きていて、まさにその「なぜか」ということが問題なので、そのことは別文（巻頭言）に書きますが、ともかく、地球温暖化説とその批判を押さえておこうと、とりあえず図書館で二冊の本を借りました。その内の、これは「温暖化説」を共鳴的にとりあげた本です。また各章の後に、その対策、とりわけ自然エネルギーのようなことをいろいろとりあげていて、そちらも参考になりました。このひとは消費者運動関係にも関わっていて、その関係から環境問題にも取り組み始めたひとのようで、いわゆる地球物理学的な意味では専門家ではないのですが、むしろそれだからこそ、エッセー風の文で、入門書的に分かりやすい本になっています。

ただ、まだ問題がとりあげられてきた走りの頃の本で、次ぎに取り上げる、「温暖化説」批判の本との対話のために読んでいたのですが、論点が浮き上がってきません。読んでいて、いろいろ疑問も出てくるのですが、ここでは簡単なメモに留めます。

最初にアウトラインをおさえるために目次をだしておきます。本自体の目次は太字を使っていないのですが、読みやすくするために、太字を使います。

温暖化の衝撃——“超食糧危機”が来る

目次

まえがき

プロローグ：神の黙示——洪水、熱波、雹…九三年の異様な夏

●戦略：国際的ネットワーク——人類生き残りのため

第I部

第一章 食料パニック——“飢餓の世紀”が迫ってきた

●戦略：自給率アップとモミ備蓄

第二章 大干ばつ——水を奪う核戦争が起こる…？

●戦略：風力発電——一〇〇万 kw 原発二五基分

第三章 熱波襲来——全米で八〇〇人以上が犠牲に…

●戦略：緑の税（グリーン・タックス）——CO₂ 排出分課税

第四章 ヒート・アイランド——まず都市から灼熱化していく

●戦略：都市緑化——ヒート・アイランドをクールダウン

第五章 火の嵐（ファイアー・ストーム）——異常乾燥で森林が、燃え上がる

●戦略：植林——アラスカ免責で CO₂ 半分吸収

第II部

第六章 二酸化炭素（CO₂）——石油に頼る“火の文明”の宿命

●戦略：EV（電気自動車）——CO₂ 一二%も減らす

第七章 温室効果ガス——二〇世紀“文明”のしっぺがえし

●戦略：ビヨンド・ビーフ——牛肉食べなきや、温暖化防げる！

第八章 極地の氷——北極の氷は溶け、南極氷棚も崩壊

●戦略：高温空気燃焼——日本の CO₂ 五%削減

第九章 海面上昇——世界沿岸七割が水没、難民三億人以上

●戦略：LCA——商品の環境負荷をすべて表示

第一〇章 生物の異変——サンゴ死滅、森は北上、マラリア蔓延…

●戦略：波力発電——島国日本の無尽蔵エネルギー

第Ⅲ部

第十一章 偏西風——異様に南北に蛇行し始めた

●戦略：水素エネルギー——二一世紀は水素文明の時代

第十二章 暴風雨——超弩級のハリケーンが荒れ狂う

●戦略：メタン発酵——バイオマス燃料の代表格

第十三章 大洪水——現代の“ノアの方舟”

●戦略：マイクロ水力発電——総水力発電の八割

第十四章 大寒波——全てが凍てついた

●戦略：省エネ政策——環境はクリーン、生活は向上

第十五章 猛吹雪——激増した冬のハリケーン

●戦略：省エネ住宅——断熱材でCO₂、二%強削減

第十六章 冷夏——「天保飢饉」以来の大凶作

●戦略：地熱発電——日本は大地の熱エネルギー大国

第Ⅳ部

第十七章 保険、直撃——「行方の知れぬ」列車の乗客

●戦略：リサイクル産業——「動脈」「静脈」の産業社会へ

第十八章 原子力発電——地震直撃で八〇〇万人が死ぬ…

●戦略：深海注入法——コスト高でムリがある？

第十九章 政府批判——やる気のない「行動計画」

●戦略：太陽発電——CO₂総排出量を一三%減らす

■参考文献

あとがき

備忘録的なメモを少し

プロローグ

「一九八八年、IPPC発足。これは「気候変動に関する政府間パネル」の英語名(Intergovernmental Panel on Climate Change)の頭文字。」13P

「●CO₂は宇宙に放出される赤外線を熱に変えてしまう」16P

「さらに、“懐疑派”の超楽観も、すでに現実に起きている事実の前には沈黙するしかない。南極巨大氷山流出、シベリア温暖化、海面膨脹などなど…これらの現象から、もはや温暖化を否定することは、まったく不可能となったのである。」17P・・・批判派との論点のすりあわせの必要

「●「いずれが正しい？」正負フィードバック」18-9P

「さまざまな気候モデル予測では、二酸化炭素濃度が二倍になると地上気温上昇は一・三℃ではなく四℃前後になると、みられている。これは二酸化炭素増加による温室効果だけでなく、気温上昇にともなって起こる多くの大気・気候状態などの変化による間接効果が作

用するから。これを気候変化のフィードバックとよぶ。温暖化を促進作用を正のフィードバック。抑制する作用は負のフィードバックである。」18P・・・批判派との論点のすりあわせの必要 (以下省略)

「気候変動を一言で予測することは、きわめて困難といえる。それは複雑な気候変動システムに関連するフィードバック・ループ (因果関係の連鎖) が存在するからである。」・・・?

「因果論」というのは、二〇世紀までの遺物、相作論的函数関関として押さえ直すこと

フィードバック①水蒸気：(正フィードバック) ②雪氷：(負フィードバック) …豆炭③雲：(正・負フィードバック) 19-20P

「●森林の炭素、ツンドラのメタン、海のチッソ」20P

「●化石燃料に硫酸エアロゾル・パラドックス」22P

「●人類最大危機に“保険”対策を！」23P・・・“保険”という考え方

「●温暖化は、人間活動が原因／「地球温暖化は、すでに始まっている…」／一九九五年発表された「第二次・IPCC報告」はより深刻だ。地球平均気温が一〇〇年前にくらべて〇・六℃上昇。過去四〇年で〇・三℃も高くなっており、これは気象データや、南極の氷の分析から「過去六〇〇年間に例のない現象である」と明記している。／さらに CO₂ 濃度と気温の関連を最新コンピュータ・モデルでシミュレーション。その計算結果から温暖化の原因は、「自然要因によるものではなく、人為的なもの」と結論づけている。／つまり過去一〇〇年来の「石炭、石油など化石燃料の大量消費が原因」(第一作業部会)。同パネル予測値は、このまま行けば二一〇〇年に「地球平均気温は二・五℃上昇」「平均海面は四六cm高くなる」と警告。八月二一日、スイス、ジュネーブで「気候変動枠組み条約」にもとづく国際会議招集。緊急課題は、二〇〇〇年から「CO₂ 排出量をいかに削減するか。」

24-5P

CO₂ 濃度 280ppm(産業革命開始時)→1995年 360ppm 25P

「地球気温は一〇〇年後、〇・八～三・五℃上昇という IPCC 予測も大きな幅がある。しかし、〇・八℃上昇でとどまったにしても人類文明、始まって以来の急速な上昇幅になるのだ。深い氷に閉ざされていた最終氷河期——。当時の地球平均気温ですら現在よりわずか三～五℃低かったにすぎない。すでに温暖化の早さは極めて異常レベルなのだ。「気温上昇スピードが一〇年ごとに約〇・一℃を上回ると膨大な被害がでる恐れがある」と IPCC 報告は警告する。しかし予想上限値の三・五℃なら警告値の三・五倍もの容赦ない猛スピード変化になる。」26P

「●最悪、気温四・五℃上昇を覚悟すべき／今後の地球気温上昇は、さらにハイピッチになりそうだ。／IPCC報告は、これまで「CO₂ 排出規制が、ほとんどない」と二一〇〇年までに、平均気温は二℃前後あがる、と予測していた。しかし、中国をはじめアジアなど発展途上国のエネルギー消費は爆発的に増えている。こうして排出量が大きくなり、気候が CO₂ に反応する「感度」がより敏感だと、「最悪では約四・五℃の上昇もありうる」のだ。……………」27P

「「過去三年、地球海面水位は年間三 mm ずつ上昇している」新型レーダー衛星の探知結果だ。これは温暖化による海水の熱膨張に符合する。」27P

「海面が五〇cm～一 m 上昇すれば、中国では四八都市を含む九二万ヘクタールもの広大な

土地が浸水する。六七〇〇万人もの夥しい人びとが住む土地を無くし環境難民と化す。これらの人びとは高い場所の農地に移住する。こうして農地の喪失に拍車かけられる。インドでも五七万ヘクタールの土地、七〇〇万人もの住民が水没の危機にさらされる（世界銀行調べ）。海面上昇の水没を防ぐには、高い防潮堤防を築くしかない。しかし、ベトナムだけで四七〇〇kmもの海岸線に堤防を築かなければならず、気の遠くなるような建設費投じなければならない。ほとんどの国々では不可能な出費だ。結局は沿岸の低地を捨てて、人々は高台に移住することになる。」28P

第I部

第一章 食料パニック——“飢餓の世紀”が迫ってきた

CO₂ 二倍で穀物半減 34-5P——温暖化と寒冷化、干ばつと豪雨・・・関係が書かれていない、食糧不足——自然の問題←社会問題

寒冷化 53P

第二章 大干ばつ——水を奪う核戦争が起こる…?

干ばつ（と豪雨）58P——異常気象・・・関係を明らかにすること

第II部

第八章 極地の氷——北極の氷は溶け、南極氷棚も崩壊

「●北極の氷、二一世紀中になくなる…！」111P

「●都もスッポリ…南極に巨大冰山、続々漂流」112P

第九章 海面上昇——世界沿岸七割が水没、難民三億人以上

「●国が海に消えて行く…モルディブの叫び」117P

「LCA（ライフ・サイクル・アセスメント）——商品の環境負荷をすべて表示」126P

第一〇章 生物の異変——サンゴ死滅、森は北上、マラリア蔓延…

病気は気候変動だけで語れない——因果論的単純化

「インドネシアの最高峰ジャヤ山（ニューギニア島）は、海拔五〇三九m。唯一、真っ白い万年雪をいただいていた。ところが周辺地域の温暖化で万年雪が年々減少。「このままでは“熱帯の雪山”が消滅する」と専門家の調査隊は懸念する。」140P

第III部

第十一章 偏西風——異様に南北に蛇行し始めた

「●海水温上昇（エルニーニョ）、偏西風の大蛇行」154P——「●海水温が低くなるラニーニャ現象」156P・・・反対の現象、これを温暖化説から説明していくこと

「偏西風の蛇行の原因には、この①熱帯海水温の他——②大陸、海面の温度差、③シベリア積雪面積、④北極圏の雪氷分析、⑤オゾン層減少、⑥森林破壊、⑦砂漠化、⑧大気中煤塵、⑨太陽活動、⑩地球自身の天体運動…などがあげられている。これらが複雑に絡み合い、偏西風が南北に烈しくうねり、熱波、大寒波、大洪水、干ばつなど局地異常気象災害をもたらしているのだろう。」156P・・・もっと内容を詰め、規定していくモーメントの強い順に並べ、関係を明らかにしていくこと

第一二章 暴風雨——超弩級のハリケーンが荒れ狂う（ママ）

「●豪雨二倍増、ハリケーン三割パワーアップ」161P

第一三章 大洪水——現代の“ノア方舟”

「●豪雨は温暖化と一致——降水量三～一五%増加」176P

「●亜熱帯化で、マダラ模様天気」177P

第一四章 大寒波——全てが凍てついた

「●新セメント（NCセメント）でCO₂発生を約四%強減らせる」184P

第一六章 冷夏——「天保飢饉」以来の大凶作

「“寒い夏”だった。／山形県は、八月上旬平均気温は、平年よりも五℃も下がった。「オホーツク海高気圧（寒気）の停留は、偏西風の蛇行が原因している。冷夏するときには強弱はあるが、だいたい偏西風が蛇行して、オホーツク海高気圧を長期にわたって閉じ込め（ブロッキング）、やませ（冷風）が長期にわたって吹く」（同ニュース（『減反問題研究会』ニュース））／やはり、地球温暖化による異常気象なのだ。そして、冷害…大凶作。」193-4P・・・温暖化と寒冷化の関係を部分的に展開しようとしている？説明になっていない？

「●冷害をピタリ当てた“お天気おばさん”」197P・・・現場のひとの感覚の大切さ

第IV部

第一七章 保険、直撃——「行方の知れぬ」列車の乗客

「「・・・・・・・・・・・たとえば、太平洋では、海水温度が二六℃を超える海域が一五%増えている。これによって熱帯サイクロンの発生確率は増大する」（スイス再保険会社、社長）」208P

第一八章 原子力発電——地震直撃で八〇〇万人が死ぬ…

「「エネルギー収支」という数値がある。生み出されるエネルギー量を発電設備等にかかるエネルギー量で割ったものだ。「投入の何倍のエネルギーを生み出すか」を表す。風力発電などは、二〇～四〇倍といわれる。原発は七〇年代の試算で四倍弱。中にはマイナスという指摘も。生むエネルギーより、食うエネルギーの方が大きい！何万年にもおよぶ廃棄物（死の灰）の管理・危険コストを考えれば、当然だ。原発に手を出せば、ほとんど未来永劫、エネルギー的、人的、経済的な代償を人類は負わされ続ける。」219-20P

第一九章 政府批判——やる気のない「行動計画」・・・そもそもやっているふりの保守政治の歴史

「●国際共同研究より対策を！」226P

「●波力…？ウチはやっていないんですけど」（NEDO（新エネルギー開発機構）」228P

「●このエネルギー政策に未来はない」230P

「「情報公開」と「市民参加」が恐ろしいほどに欠落しているのだ。このようなエネルギー政策決定のしくみは、スウェーデンやデンマーク、オランダ、ドイツなどのヨーロッパ諸国とは根底から異なっている。」231P

「●市民のエネルギー政策・四原則」232P

「①公平・公正原則」「②予防原則」「③多様・自立原則」「④経済合理性原則」232P

「・・・・・・・・日本も「二〇〇〇年には、九〇年レベルにもどす」と国際公約。ところが、言っていることと、やっていることが、まったく逆なのである。そして「この公約達成は、困難な状況にある」と言う。まるで人ごとである。・・・・・・・・」238P

「●京都会議（COP3）を「知っている」は一・三%」241P

「●温暖化より御身大事の官僚体質」242P

「●日本の温暖化対策八兆円は道路建設…？」242P

「政府の“行動計画”の中身を知ると世界中が唾然とするだろう。九七年二月二日の衆議院環境委員会で、地球温暖化防止の九五年度「行動計画」が取り上げられた。総額一一兆六四二二億円の巨費に上る。以下、委員の政府質問。「その内訳は、驚くことに七六%にあたる八兆八〇〇〇億円の巨費が、道路建設につかわれている。温暖化対策といえばCO₂を削減するためにいろいろやっているのか、とイメージするのだが、環境庁はどのように考えているのか？」道路建設が温暖化対策…とは、まさに驚愕するしかない。／政府の答えは「渋滞が減れば、CO₂が減るから…」というもの。悪い冗談はやめて欲しいと思う。風が吹けばオケ屋が…の失笑ものの理屈だ。」243P・・・何かというと大手ゼネコンにお金を落とそうとする日本政府の常套手段。

「●京都COP3会議は、爆笑の渦に？」243P

「●「私が議長に…!？」頼りなし石井環境庁長官」244P

「●地球サミットの成果も各国エゴで死文化」245P

「●日本は一兆円もの堤防建設費が必要」246P

「「CO₂濃度が毎年一%ずつ増加すると、一〇〇年後、気温はユーラシア、北米大陸で三℃以上上昇、さらに高緯度地方では六℃以上も高くなる」(気象庁のスーパーコンピューター予想)」246P

あとがき

不安と怒りが突き動かした執筆

たわしの読書メモ・・・ブログ 626

・マーク・モラノ／渡辺正訳『「地球温暖化」の不都合な真実』日本評論社 2019

この本は、地球温暖化説に関わる学習二冊目。図書館で借りた本。もう一つセットで借りた本で前の読書メモを書いた本の反対の理論。「理論」というにはあまりにもおそまつで、論理的にむちゃくちゃなのですが。

まず指摘しておきたいのは、著者は温暖化説の話をするひとを「温暖化脅威論」という押しやえ方をしています。そして自らを「懐疑論」として突き出しているのですが、内容をとらえると「脅威論否定論」です。そのあたりのことをごまかしています。

この本には、「*」で原註が付いているようなのですが、訳本には原註は載せられていません。その「*」で、ちゃんと理論的なことを押しやることをしている可能性がありますが、この訳本をみるかぎり、ちゃんと対話をする意志が毛頭みられません。そもそも原作者が「自分は科学者ではない」と書いているのですが、そもそもこれは論理の呈をなして、単に「脅威論」者の矛盾をあげつらっているだけで、温暖化論を真っ正面から論理的に批判した本にはなっていません。感情論的なところに終始しています。

もうひとつ、はっきりしていることはアメリカでは、民主党と共和党のあいだで温暖化問題が政争の具になっていることです(主な責任は共和党にあるとしか、一連の動きの中でわたしには思えません)。きちんとした論理で論争をしているようにはとらえられないの

です。そもそも、今日的に、リベラル民主党と右派共和党というような争いになっているのですが、民主党の中に左派的なひとがいるにしても、どちらにしても資本主義の枠内の話です。どちらにしても、金儲けの論理にとらわれ、この「温暖化」問題をネタに金儲けしようとしているのです。今日、SDGsという言葉が出ていますが、これは、「持続可能な開発」と訳されているように、まさに飽くなき利潤を追い求める資本主義においては、経済成長ということを求めざるをえず、そのことが差別や環境破壊を生み出して来たという矛盾が、根本的にあるのです。それを解消しようとするなら、資本主義を止めるしかないのです。

著者は民主主義者を装って、アフリカのひとたちが脱炭素エネルギーしか使ってはいけないとなると生きられなくなると言っています。反・環境破壊運動を進めているひとの中にはいろんなひとがいて、ちゃんと論理的な発言をしているわけではないというところで、おかしい発言をしているという話をしていますが、いきなり、100%切り替えなど主張などあり得ないのです。著者は揚げ足取り的な批判を繰り返しているのですが、著者はそもそもトランプ支持者のようなのですが、アメリカファーストというところでトランプが排外主義的なことをしてきたことを押さえ批判して、トランプ支持をとりさげトランプ批判に回ってから、アフリカのひとたちの命や生活の心配の話をするのです。

どうも、この著者は、「後進国」は「先進国」にならって産業革命から同じ途をたどらなければならないと思っているようですが、まきを使って料理するところから、化石燃料を経ずして（原子力なども論外として）、自然エネルギーを使うという途を考えないのでしょうか？ 飛び越し可能なのです。ところが、資本主義は「後進国」を取奪や金儲け的なところでしか考えません。だから、スーザン・ジョージが押さえたように、WTOや世界銀行を通して、古くからあった自然と共生する生活を破壊し、そこから、いきなり市場経済の論理に組み込んで、「先進国」の取奪の対象にしてきた歴史があるのです。資本主義の論理ではこのことは解決し得ません。国家という枠組みを超えた無償の支援が、というよりコモン（共有）の論理が必要になるのです。

このようなことを書くと、反共精神の中国嫌悪らしい著者は、中国の専制支配批判を持ち出すのかもしれませんが。そもそも中国は社会主義国家ではないのです。この話を始めると、話が長くなります。すでに書いている事、また書いていくこと別文参照ください。

話を、冒頭の話に戻ります。そもそも科学の話は、よく分からないことの方が多いのです。ですから、よく分からないことで、大変な事態がもたらされることには手を出さないということを原子力研究者から反原発に身を投じた故高木仁三郎さんが提起していました。「懐疑論」という立場にも通じる事です。冒頭にも書きましたが、この著者の立場は、温暖化が破滅をもたらすかもしれないという懐疑を否定している、温暖化否定論で懐疑論ではないのです。

そもそも環境問題の出発は、産業の発達バラ色の未来をもたらすということに懐疑をもつことから始まっています。エンゲルスが『イギリスにおける労働者階級の状態』という本のなかで、労働者のおかれている苛酷な労働環境を暴き出し、更に子どもを労働の場に引っ張り出すことのなかで、どのような苛酷な状況になっているかを描いていました。そのような中で、その場限りの使い捨てで、「今だけ、ここだけ、自分だけ」の資本主義の

論理では再生産自体があやうくなるということで労働法をつくって規制していくシステムを作ったのです。更に、グローバリゼーションの進行の中で、環境破壊や差別なくしては資本主義が延命できないという構図がとらえられる中で、資本主義自体に懐疑の眼が向けられることなのです。そういうことも含めて反・環境破壊・運動自体が懐疑論でなり立っているのです。だから、著者が温暖化論批判への論理性で自信のなさから、「懐疑論」という突き出しをして、内実的には温暖化否定論を展開するというごまかしをしているのです。

さて、この本の著者は、感覚で文を書いているのですが（エッセーならばそれはそれで良い話ですが、議論の書ではなくなります）、著者がそれまでの展開してきたことならすると、最後にさらに論理的意味不明の蛇足的な文を書いています。

「当面まだ生まれていない優秀な蓄電システムが完成したら話は終わる。どの国の市民も、スーパーで買ったソーラー発電装置一式をとりつけ、送電網から切り離せるような日が来れば、温暖化の「対策」をめぐる論争は意味を失う。上意下達のやり口も無用になるし、莫大な補助金をつぎこみながら無風の夜にはオブジェでしかない太陽光パネルや風車を強制し、安くて効率の高い化石資源の利用を禁じる必要もなくなる。」 298P

これは最後の論理破綻、「安くて効率の高い化石資源の利用を禁じる必要もなくなる。」と書いているところ、前と後ろで論理整合性がとれていません。前のことが実現すれば、金を出して化石資源など買うひとがいなくなるからです。その論理破綻を指摘すると、前の方の「温暖化論」自体の議論が必要なくなるというところで、自然エネルギーシフトに転向してきたととらえられるのでしょうか？

今回は切り抜きメモで抜き出して逐一批判は省略しました。後、二冊購入した本の読書メモを残します。

たわしの読書メモ・・ブログ 627

・広瀬隆『地球温暖化説はSF小説だった——その驚くべき実態』八月書館 2020

広瀬さんは、古くから反原発というところで論陣をはってきただけのひとです。反原発運動のひとたちにもいろいろ情報を提供してくれています。わたしも何冊か本を読んでいます。ただ、ちゃんと運動的なことを押さえて論を展開しているとは思えないのです。もちろん運動ということは多様性が必要ですし、その多様性を認めあう中でこそ進んでいくことです。また、論理・論理で進めていくことでもないと思うのです。この本のタイトルにもなっている「SF小説」とか「SF映画」ということが、「科学神話」（註：「(追記)」参照）への批判として未来社会への警鐘を鳴らしてきた有効性も押さえる必要があるとも思っています。勿論、論理的な話をしているときに、空想のようなことを持ち出してくると、論はかみ合いません。そして間違った情報に基づく運動というのは、運動の混乱を生み出すし、運動自体に壊滅的な打撃を与えることになるときもあります。広瀬さんもそういう思いをもって、「地球温暖化説」の批判をしているのだとは思います。

何のために議論をしているのか、議論をするのか

ですが、そもそも「なんのために議論するのか、しているのか」というとらえ返しが必要になると思います。

今、日本では若者の保守化や政治離れということが進んでいるといわれています。その中で、若いひとたちが 2015 年には S E A L s という名で、安保法制に反対する運動を起こしました。それはそもそも自分たちの未来が脅かされている不安からの立ち上がりでもあったと言えらるでしょう。今、若いひとたちが動いているのか「気候変動」や入管法の問題、そして性差別の問題です。反原発の運動は、フクシマの反省と言うことも含め、自分たちの世代が原発建設を止められなかったという反省も込めた、高齢者の参加が多くなっています。若いひとたちが立ち上がっているのは、単に気候変動ということだけでなく、今、そして将来の自分たちの生きる環境が危うくされている、生きること自体が危うくされていることがあるのです。そういう中での、もっとも分かりやすい取り組みやすい反環境破壊運動なのです。それは、昨今「自己責任」論ということにとらわれないところの(註1)、「気候正義」という突き出しになっているのだと思います。

さて、わたしは広瀬さんの提起している温暖化説批判での議論が、決着が着くならば着けてもらいたいと思います(註2)。ですが、後に書きますが、どうも決着がつかないとは思えません。広瀬さん自身も、「地球物理学的なことは結局分からないのだ」というような主旨のことも話しています。そのことに照らして、気候変動論者への批判が反原発運動に何のメリットがあるのでしょうか？

対話ということへのスタンスに疑問をもっています。映像鑑賞メモでとりあげた(註3)講演の中で「精神障害者」や「知的障害者」への差別語を連発して相手を罵倒しながら、対話を求めているけど出てこないと批判していますが、そんな「対話」の姿勢では、そもそも対話を求めているのか疑問ですし、対話が成立し得るとはとても思えません。

広瀬さんのダブルスタンダード

そしてそれ以外にも、そもそも対話のむずかしさということの中には、広瀬さん自身のダブルスタンダードの問題があります。広瀬さんは、科学者という立場で議論しているのか、「素人」を自認しつつ科学的なことも身につけてきたというところで運動的な観点から議論しているのか、二つのあいだで行ったり来たりして、論点をずらしているのではないかとわたしはとらえています(註4)。前者の立ち位置で対話を求めるのなら、専門家とのあいだで議論することです。今回この読書メモを載せている号のわたしの「反差別通信」に広瀬さんの講演の総集編ビデオで取り上げていますが、広瀬さんが対話する相手として、最適なひとは、広瀬さんも名前をあげているノーベル賞をとった真鍋淑郎さんです(註5)。運動的な観点で話をするのなら同じビデオの中で「素人は専門家の話を聞け」(註6)と叫ばれるのではなく、「専門家は素人に分かるように話せ」という提起になるはずですが。

さて、素人のわたしが、運動のための理論というところで、論理的思考をそれなりに鍛えてきた立場で、論理的な矛盾の指摘をしておきます。

温暖化批判と CO₂ による地球温暖化説批判のごちゃ混ぜ

そもそも温暖化と CO₂ による地球温暖化説批判をごちゃ混ぜにしています。前者自体をきちんと批判してはいません。後者ははっきりと批判していて、これが主旨になっています。前者もそこから否定的批判をしようとしているところもありますが、これに関しては、曖昧になっています。広瀬さんの言葉を引用したとして、「氷河期に入っている」とかいう話をしているひとがいて、また寒冷化が起きていると言っているひとがいるということは

広瀬さん自身が言っているし書いていることです。この話は結局、予想は難しいということで曖昧化されたままです。

このあたり、まず、地球物理学的なところ、太陽と地球の関係が気候変動の大きなモーメントだという話が出ています。確かにそうだと素人ながら思います。あえて、SF小説のような話をしますが、明日なり一年後に地球が減びるとなると、CO₂による地球温暖化論が是が非かなんて議論自体が吹っ飛びますし、反原発運動も吹っ飛びます、そもそもほとんどの運動総体が吹っ飛ぶことです。そもそも、ひとがどうあがいても変えられないことをどうこうしようという話になりません（註7）。トランプ政権の発足間近に、アメリカ中西部の共和党知事の州で起きた、石油流出事故をめぐる、共和党支持者の対応を描いた本（註8）が、そのことを如実に示しています。わたしたちは、変えられることを問題にしているのです。

二酸化炭素の増加は温暖化だけの問題？

広瀬さんの論に影響をうけたひとで、二酸化炭素は役に立つ・必要だといかいう話をしているひとがいます（註9）。確かに、二酸化炭素からの植物の光合成がなかったら酸素もできません。ですが、森林伐採で問題にもなっていますが、二酸化炭素と酸素のバランスの問題ではないでしょうか？（註10） また、「脱炭素だと言っているひとがいるけど、人間の体は炭素なしには成り立たない」という話をしているひとがいます。脱炭素ということは、いろいろ厳密にいうときの頭書きや、注釈を省略した表現です。その頭書きは「エネルギー利用としての」脱炭素です。これに、石油製品でのプラスチックゴミで問題になっている自然にない炭素化合物で自然に還らないものはつくらないという注釈——意味も含んでいることもあるのだと思います。そもそも広瀬さんの言説は、論理厳密性を欠いています。たとえば、「メガソーラ批判」ですが、ここでの広瀬さんの論旨は「山の斜面に森林を伐採して作るメガソーラは止めるべきだ」というだけの話で、更に追加して言えば、食料生産している農地を潰して、メガソーラをつくるとかも止めようという類いの話も出ます（註11）。

そもそも、広瀬さんは原発に反対の立場で、化石燃料にこだわっているのですが、原発か化石燃料かという二項対立ではないのです（註12）。自然エネルギーというところに運動全体としてシフトしていっていることがあり、そもそも日本は原発推進のために、最先端を走っていた太陽光ソーラーシステムの開発を、原発を推進する政府がエネルギー政策として意識的に潰してきた歴史があるのです。広瀬さんが、前の本を出したときは、まだ自然エネルギー技術を定礎していく過渡期的時期にあったのですが、そこからかなり使える技術になってきているようです（註13）。勿論、まだまだ検証が必要なこともあるのですが。広瀬さんは自然エネルギーの批判もしています。それはもっと詰めていく必要もあるのですが、一方で化石燃料の技術が進んできていることをとりあげているのですが、自然エネルギーには総体的にコメントしていないのです。将来の有望な、そして現代的にも使われている自然エネルギーの技術が更にすすんでいくだろうことをスポイルしています。原発反対だけで絞込込んで、原発か化石燃料かという二項対立図式を作り出すという我田引水型の批判になっているのではないのでしょうか？

数的に%が少ないから影響を無視する・軽視するという論理批判

もうひとつは、二酸化炭素は空気中成分が少ないから、無視できるかのような話についての疑問です。二酸化炭素の空気中の割合はわずかだから、それは増えても影響がないというような話なのですが、反原発運動の中で、汚染水の海洋放出の話が出ていますが、それを支持するひと海は広いから大丈夫だという話をしています。また、フクシマ原発事故後の甲状腺癌の話も、発生率の%が低いという話で切り捨てようとしています（註14）。そもそも環境破壊による被害ということでは、「水俣病」の水銀中毒問題があります。これも海は浄化能力があるから大丈夫と流していたのです。食物連鎖による水銀の蓄積をスポイルしていたのです。胎盤は水銀を通さないということで、胎児にまで被害を及ぶことも見落としてしまいました。わたしはそもそも何か見落としているのではないかと考えます。とりわけ化学反応のようなことをです。シアン化合物の致死量は体重の何%でしょうか？

もうひとつ、被害ということのとらえ方の問題ですが、人口の何%とか、ワクチンの副反応の場合（註14）などは接種者の何%とかいうのはなしがされるのですが、被害は当人や家族・関係者にとって1分の1です。被害の問題はここでとらえ、被害が起きないようにするということ、起こしてしまったときは、被害を与えた側に立証責任があることとして補償していくことが必要です（註15）。

そもそも、何のために「温暖化論」を批判しているのか分かりません。そのようなところも含んで、そもそも科学でどこまで被害を予想できるのかということを押さえるならば、被害を過小評価するひとに対して、広瀬さんが我田引水的にですが、引用している文が参考になります。

広瀬さんは、「ギリシャの哲学者ピタゴラスが生きていれば、「汝よろしく沈黙せよ。さもなくば沈黙に優れることを言え」と、一括される・・・」11Pということを書いています。そもそも、どこまで科学で立証できるのか、ということがあります。広瀬さん自身地球物理学でどこまで証明できるのかということも書いています。広瀬さんは反原発運動の理論家です。今回の広瀬さんの書いていること、「温暖化説」やそこに依拠する運動家を、まるで反原発運動の敵のような批判の仕方をしているのですが、わたしはそもそも反環境破壊運動というところで一緒に活動していく仲間だと思っています。理論が間違っていると思えば、対話し是正し合い、一緒に運動していく道筋を探ることで、敵として罵倒する事ではないのです。

反原発運動を広げていくという事で言えば、原子力か化石燃料かという二項対立ではなくなっているときに、地球温暖化説を批判して何のメリットがあるのでしょうか？ 若いひとたちが参加し、しかも、各国政府さえも動かして、影響力をもっています。反環境破壊運動というところで、反原発の運動にも参加していく可能性をもっていることです。そんな運動を潰して、環境汚染ということにもつながる開発を進める側の勢力を増大させることになります。勿論、誤った情報で運動を進めていくということで混乱が起きると批判するならば、そういう主旨で議論を深化させていくことも必要ですが、簡単に結論がでるとは想えません。ならば、ピタゴラスの提起を受け容れ、沈黙することです。そこで、被害が生じるとは想えないのです（註16）。

二項対立図式（註12）から脱して

原発か化石燃料かという二項対立ではないという話はすでにも書きましたが、二項対立図

式は、この「温暖化批判」でも、起きています。前の読書メモでとりあげましたが、懐疑論か温暖化説支持かという対立が起きているようです。実は、これは懐疑論と突き出していること自体があやまりではないかと思っています。「温暖化説」支持か否定かということで、懐疑論側は、実はよく分からないから、懐疑論だと誤魔化しているのではと想えるのです。そもそも、寒冷期か温暖化期かということでの議論もよく分かりません。毎年、ジクザクで変化しています。「期」と表現し得ることではないと思えます。広瀬さん自身が使っている図を俯瞰的に見ると、右肩上がりになっていて、平均をとるとわずかなりとも気温があがっているととらえられるのではないのでしょうか？ それがどれだけ影響がでるのかは、プロ同士の議論に任せるしかありません。わたしも、次の読書メモの本 628 で学習しますが、十全な結論が得られるかどうか分かりません。分からないときには、「自然に適う生き方をしよう」(註 17) ということで、二酸化酸素をふやさないようにしようという結論しか出ません。

そもそも、このような議論の背景には、科学礼賛か科学否定かという二項対立の図式があります。広瀬さんは、ビデオの講演の中で、「産業革命以来の科学を否定するのか」という恫喝(恫喝というのはとりあえずわたしの個人的感想です)のような話をされているのですが、そういう二項対立自体を斥けることです。科学の発展ということの正と負の側面があり、その負の側面がまさに核爆弾と原発だったのですから。「根源的解決か——現実的対処か」いう二項対立のごまかしは許されないとしても、短期的解決、中期的解決、根源的解決というところで、問題を立てていくことです。日本は原発の事故後電力供給源として占める割合が減っている今、即時廃止できることで、フランスのように4分の3くらい頼ってしまっている処をどうするのかの問題があります(註 18)。きちんとした対話と議論の深化が問われています。

運動の理論としての原則

わたしは広瀬さんは反原発運動の理論家だと思っています。原発に反対する理由として放射線被害がひとの命を奪い、ひとの生きる基盤を破壊していくことへの反対の立場だと思えます。それならば、その運動や理論的展開の中でひとを傷つけることを回避する姿勢に賛同されると思います。そもそも、対話を求めているひとへ罵倒するような批判(とりあえず個人的感想です)は、対話を求めているという姿勢自体を危うくします。

わたしは自らの「吃音者」という「障害者」当事者の立場から、差別ということを考え続け、自らの被爆二世の立場からの反核、また原発が差別で成り立っていることや、事故の際の避難弱者の問題も考えつつ、反原発運動に関わっています。そういう立場で、広瀬さんの{アスペルガー}という立場を表明しているグレッタ・トウィベルさん批判がどうしても理解出来ません。彼女は忖度できないというところで、「障害者」と規定されるのですが、それを逆手に取って、忖度しないということを活かして、大人たちを批判しているのです。それを批判している内容は、まさに、この社会の「障害者」への差別意識に乗った、差別そのものです。話が長くなるので、これについて別文にします(註 19)。

(註)

(註) などつけると、読みにくくなるのですが、対話の論理的厳密性を追求するために、

(註) を書いています。そんなことはいらぬというひとは (註) はパスしてください。

1 たぶん、そこから入って、自己責任論自体をも批判して、不安総体も問題にしていく可能性をもっているのだともわたしは思っています。

2 わたし自身も、他人任せではなくて、次の読書メモで真鍋淑郎さんの温暖化説の学習をしますが、たぶん、わたしの学力では結論を出せないと予感しています。

3 この読書メモを掲載している「反障害通信」に同時掲載している、「たわしの映像鑑賞メモ 074 / 広瀬隆講演録集編ビデオ「二酸化炭素 CO₂によって地球が温暖化しているという説は科学的にまったく根拠がないデマである」2022 in 東京水道橋東京学院他」参照。

4 これは前の読書メモ 626 でとりあげた温暖化説と懐疑論、実は温暖化説と温暖化否定論とのすり替え的論議に通じるところです。

5 ノーベル賞批判をしていて、そんな賞をとったひとは対話できないみたいな話になっているようですが、ノーベルがダイナマイトという戦争の道具になるようなものをつくって、そんなひとは作ったノーベル財団のノーベル賞という批判をしているのですが、そもそも戦争の道具になるものを作ってしまったという反省というところからのノーベル財団がつくられたことをスポイルし、賞の対象選考にいろいろ矛盾があるにせよ、そのことをもって、懐疑を抱いたとしても、その研究が中身の検証なしに全否定されることはありません。また「数式をならべた理論」というようなことを批判的ニュアンスで言っていますが、数学は自然科学の言語であるという定式からすれば、そもそも広瀬さんは素人として対話を求めるという話になります。

6 そんな専門家には、神のようにあがめる宗教心で接するひとは別ですが、素人は話を聞こうとは思わないと思います。そもそも、広瀬さん自身がこの本の中で、グレタさん批判で、そういう宗教心のようなことでひを持ち上げることを批判しています。

7 ちなみに、キリスト教保守派の考え「将来のことは神の思し召しのままに」ということがあり、これが右派の保守の地盤を形成していくのですが資本主義の「いまだけ、ここだけ、自分だけ」がリンクしたことが、共和党右派のトランプ支持につながっているのではとわたしは考えています (註 20)。

8 「たわしの読書メモ・ブログ 523 / A.R.ホックシールド/布施 由紀子訳『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店 2018」(「反障害通信」88号 <http://www.taica.info/adsnews-88.pdf> 所収) 参照

9 この話は、前の読書メモ、マーク・モラノの本の翻訳者、東京理科大学の渡辺正さんの朝日新聞『論座』の論攷でできます。CO₂ が植物にとって必要だという話をしているのですが、学者がこんな非論理的な話をするのかと驚いているのですが、二酸化炭素が増えすぎるとどうなるのかということが論点なのです。次ぎの読書メモで取り上げる真鍋さんの研究はまさに、そのシュミレーション研究なのです。

10 フクシマ原発事故直後、テレビに出た原発擁護派のひとは「放射線はからだにいい」とかいう話をしていました。確かに、X線撮影とか、癌治療での放射線治療のことはあります。こういう話は「頭書き」を省いた言い方になっています。ちなみに、酸素の話で言えば、スポーツの後に酸素を吸う話もあり、いろいろ酸素が使われるようです。勿論酸素吸入が必要なひとでも、それが多すぎると肺の機能が失われるし、そもそも酸素は爆発

を起こすこともあります。二酸化炭素が体にいいという話では、二酸化炭素を吸う必要という話は過呼吸になったときにビニール袋で口をおおい一時的に二酸化炭素を吸うという事くらいしか思いつきません。勿論植物の光合成には必要なのですが、それは植物を減少させる、開発の名で森林伐採していく中で植物を減らすと吸収力も減っていくことで、総体的にどうとらえていくのかが、問題になっています。資本主義の「今だけ、ここだけ、自分だけ」の精神自体を批判していく必要があります。資本主義の論理で進むSDGsには危うさを感じています。わたしは反・環境破壊・運動はそのようなところを含んで、展開していく必要を感じていますし、「地球温暖化説」の是非は一応括弧でくくれば、グretaさんもビデオのなかで広瀬さんが散々批判している斎藤幸平さんもそのようなところをとりあげていると思っています。

11 メガの話は資本主義的生産様式の巨大産業化批判で、わたしも賛同します。ですが、メガを一挙に否定にすると、例えば農業生産物の大量生産方式を否定すると世界的に食料が足りなくなって、餓死者がでることになります。移行期には砂漠などでのメガソーラは許容されると思います。勿論、地元でつかうのではなくて、他国に移送するという、収奪構造は否定することです。何かそこで問題になることがあれば、勿論再検討が必要になるとは思いますが。

12 既成の観念にとらわれないということを、哲学的に展開した「ポスト構造主義」とかいう流れの中で、「脱構築論」を展開したデリダが、とりわけ問題にしていたのがこの二項対立図式批判でした。

13 前の読書メモ 626 でとりあげた温暖化説批判の著者が、そもそも論理破綻的なのですが、「当面まだ生まれていない優秀な蓄電システムが完成したら話は終わる。どの国の市民も、スーパーで買ったソーラー発電装置一式をとりつけ、送電網から切り離せるような日が来れば、温暖化の「対策」をめぐる論争は意味を失う。上意下達のやり口も無用になるし、莫大な補助金をつぎこみながら無風の夜にはオブジェでしかない太陽光パネルや風車を強制し、安くて効率の高い化石資源の利用を禁じる必要もなくなる。」と書いています。論理破綻というのは、「安くて効率の高い化石資源の利用を禁じる必要もなくなる。」と書いていますが、前と後ろで論理整合性がとれていません。前のことが実現すれば、金を出して化石資源などかうひとがいなくなるからです。

14 フクシマ事故の後の甲状腺癌の発生について、百万人に一人か二人しか出ていなかったのが、少なく見積もっても数十倍発生し、手術が行われているのに、政府やその擁護者から「因果関係は実証されていない」ということを言っています。そもそも、確率函数的なところで発生率を出していたのに、哲学・科学の世界ではパラダイム転換（註 21）が起きて、因果論などという論は二〇世紀までの遺物になってしまったのに、まだ「因果論」という概念を持ちだしています（広瀬さんも「因果関係」という言葉を使っています 67P）。そして、摩訶不思議なことに、発生が多くなっていることを、検査を多くしているから、癌が発見されるのだという話さえ持ち出しています。こちらは、パラダイム転換のひとつの事例になっているいわゆる量子力学などで立てられる「観測者の問題」なのですが、そんなことを持ち出すのなら、新しい函数的関連を示すことです。だいたい、そのような批判は、そもそも手術していることを必要ではない手術をしたという論理で、手術をした医

者から「怒りをもって」反論されています。勿論、量子力学へ転換したとはいえニュートン力学が使える場合もあるように、因果論も使える場合があります。それは、函数的聯関を示す方程式で説明すると、変数がひとつの単純な $f(x) = ax + b$ のような場合、もしくは変数が複数あっても、もう一つは、近似値的なことで、確率的に少ないから無視できる、しようとする場合です。それにそもそも、変数が複数のときで、因果論というのは加算方式しか考えません。実際に起きているのは、錯分子構造とか入れ子型構造とか言われる、函数内函数のようなこともあります。「変数の%が少ないから」ということをもちだすひとは、函数の中で値が大きくなる場合を想定していません。「因果論」という言葉が補償の問題が生じるとき政府関係の文書ですでてくるときは、補償をしないように被害を少なく見せるごまかしの常套手段の言葉を使っていると、わたしはとらえてしまいます。

この話は、コロナワクチンの副反応被害の問題にも通じています。このワクチンは接種後の副反応がかなり出ていました。接種後の死者が接種者の内僅かなパーセントだと言っていました。わたしの概算でコロナウィルスで死んだとされるひとの6%くらいの「接種後の死者」が出ていました。ワクチンという性格で、この%は余りにも高い数字だとわたしは思います。しかも、これを「因果関係が不明」とか、「判定不能」ですまそうとしています。アメリカでは、「判定不能」ですませないとしてコンピューターを使って解析作業が始まっているという話がでていましたが、厚生労働省は、「将来の課題です」と応答しています（BSTBS「報道1930」）。これは、やる意志がないときの霞ヶ関・永田町の常套句です。この作業は、函数的聯関の方程式の変数を洗い出し、函数の方程式のようなことを構築する作業なのではないでしょうか？ 今、「有志の医師の会」が、情報開示を求めて裁判を起こしているようです。

15 そもそも補償以前にひとの生きる保障が必要で、これが実現すれば、補償は必要ではなくなります。

16 広瀬さんにも総体的にとらえて批判を控えるという姿勢があるようです。「一方、まともな科学者たちで、CO₂ 温暖化説が科学的にまったく根拠のない仮説だと知っている人は非常に多いが、彼らも「石油・ガス・石炭の過剰な使用を抑制する」ことが資源保護のためになるならと、この誤った仮説を黙って見過ごすことが 20 年ほどの慣例になってきた。私自身も、ドイツ人の自然保護運動に対して、彼らが「CO₂ 批判」と同時に「原発反対運動」をおこなっていたので、誤った CO₂ 温暖化批判を黙認してきた。しかし現在では、CO₂ 温暖化教の政治的な活動が狂（ママ）信的になって、「危険な原発推進論」の復活と、無理な「自然エネルギー拡大利用論」にまで誇張され、挙げ句の果てに、「地球温暖化対策を急いでとらねばならない。COPだ。自然エネルギーの普及だ」と叫んで、メガソーラと風力発電で森林伐採の自然破壊の自然破壊に熱中し、野生動物を棲息できないように追いつめるところまで逆走しているので、自然破壊者たちを黙認できない。……」55-6P……
そもそも化石燃料の採掘でどれだけ環境破壊してきたのでしょうか？ それに、「CO₂ 温暖化」説が否定されたとして、人間への害さえ考慮しない企業が、「野生動物の保護」で森林伐採を止めるのでしょうか？ 逆に促進してしまうのではないのでしょうか？

広瀬さんは何か勘違いしているようです。それは自然エネルギー自体の問題ではなく、それを使って金儲けしていく企業の姿勢の問題です。なんでも金儲けの手段としてしか考

えない、しかも「今だけ、ここだけ、自分だけ」の精神で環境を破壊していく資本主義の矛盾です。そもそも自然エネルギーを使おうということは、反・環境破壊・運動の中から起きてきていることで、それが環境破壊をもたらしたら本末転倒なのです。原点・原則を押さえようと提起すればそれで済む話です。それが、金儲け主義で歪められるのを避けられないなら、「資本主義止めますか、人間止めますか」と突き出すことです。

17 これは原子力研究者が反原発というところから転じた専門性をもった市民活動家の高木仁三郎さんの言葉です。「自然との共生」ということがいうけれど、これ自体自然への奢りだとして、「自然に適う」という生き方を提言しています。

18 これ自体国境を越えた連帯というところで、解決可能だと思っています。ちなみに「資本主義」で可能かという問題があります（註 22）。

19 これについては、「(追記)」で記載。

20 「トランプはおかしいけど、トランプの地球温暖化説批判は正しい」というような話をビデオの中で話されていたのですが、トランプは、自分が権力をにぎっていたいところでの自らの支持をとりつけるための（トランプ自身の主張の）「中味のない論」というところで、「フェイク」という言葉で批判を繰り返せば、（ことの真否は別にして）ウソもホントになるというナチ的手法（これはわたしの中では、麻生元副総理のいう「ナチ的手法に学べ」という話とリンクしていきます）、「中味のない論」は正しくはないのです

21 「パラダイム転換」とは、「パラダイム＝基本的な考え方の枠組み」の転換ということで、クーンというひとが使った言葉です。それは、コペルニクスが、それまでのアリストテレス・プトレマイオスの中世までの宇宙観の天動説から地動説に転換したことを押さえて使ったことです。そのことは宇宙観にとどまらず、認識論や科学の世界でも、中世的世界観から近代的世界観へのパラダイム（認識の基本的枠組み）の転換がおきたとされています。ここで、わたしが問題にしているのは廣松渉というひとが指摘している近代知の地平から現代の哲学・科学を貫いておきた、もうひとつのパラダイム転換です。わたしが出した本、三村洋明『反差別原論——障害問題のパラダイム転換のために——』世界書院 2010 から、廣松さんの文を再引用しておきます。

それは、認識論的な射影においては従前の「主観—客観」図式に代えて四肢構造の範式となって現われ、存在論的な射影においては、対象界における「実体の第一次性」の了解に代えて「関係の第一次性」の対自化となって現われる。（これは論理の次元でいうならば、同一性を原基的とみる想定に対して差異性を根源的範疇に据えることを意味し、また成素的複合型に対して函数的関連型の構制を立てる存在観となり、因果論的説明原理に対して相作論的記述原理を立てる所以となる。……（略）……）……（略）……。

そこにおいては、いわゆる存在論的・認識論的・論理的諸契機が統一態をなしている。

（廣松渉『事的世界観への前哨—物象化論の認識論的=存在論的位相』勁草書房1975年「序文」

ii）

22 広瀬さんは IPCC データー改竄問題を取りあげています。わたしは、団塊の世代ですが、当時産学共同という事が出てきていて、それに対する批判の運動がありました。大学は「象牙の塔」的側面もまだ残っていて、学問の自由とか、基礎研究にも公的助成が出ていたのだと思います。今は企業からの研究室へ金も当然のごとく出ていて、大学の中で

ベンチャー企業を作るという事態が起きています。そもそも、金になるかならないかで、研究者が研究内容を設定していくようになり、大学の教員の身分さえ、非常勤が増えてあやうくなっています。そんな中で、データ改竄など当然のようにおきてくるのではないのでしょうか？ 企業でも「ばれなきゃいいんだ、ばれたら謝罪すればいい」というようなデータ改竄や不正が起きています。それは日本では、官僚自身が改竄に手を染めることへの右に倣いという意味も持っています。不正企業の謝罪記者会見というのを見ていると、ほんとに謝罪しているのという姿勢が見られないということが如実に表れているのです。だから、それは科学界も覆っている問題で、まさに行き詰まった資本主義の矛盾なのです。そこまでとらえて批判していかないとと思っています。懐疑の眼は総体的に向けられることです。

(追記)

一応、このメモを書き終えて、実はこの文を出そうか、お蔵入りにしようか迷っています。何のために批判するのかということで、一緒に運動していく仲間であるひとたちへ意味のない批判をしているということで、この文を書いているのですが、今度はこの文自体が、反原発運動内部の論争というようになっているからです。出すときには、また「(追記)」を書くことになります。

この本は、二章からなっています。で、読み終えて全体的にとらえようとする、どうも最初1章は、温暖化説自体を否定しようという意図があったのに、2章では、温暖化そのものは認めCO₂温暖化説の否定だけをしようとしているようにもとらえられます。

温暖化が起きていない、寒冷化になるのだったら、そんな構成自体意味をなさないのですが。

最初の(註)科学神話の話。本文の(註)に入れ込もうかと思ったのですが、話がどんどんズレていくので書きませんでした。どうも広瀬さんには、「科学信仰」というようなことがあるのではないかとと思っています。わたしは、反差別論を始めるころに最初に読んだ「科学の名による差別と偏見」ということもあって、科学ということ懐疑的なのです。フランシス・ベーコンの「自然の征服」とか「自然の克服」ということへの批判的なところから、反-環境破壊-運動があるのだとわたしは思っているのです。理論ということ自体にも、「ひとは理論では動かない利害をめぐって動くのだ」ということで、わたしの中にもある理論的に突き詰めていく指向自体への自戒的なことも抱いています。いかに、利害ということ対話していけるのかということなのですが。。。。。

そんなことやら、いろいろ細かいことで気になる非論理性の指摘や世界観の違いの話で、いつもの切り抜きメモとそれへの批判的コメントを残したいという衝動が湧いてもきているのですが、余りにも長くなるので、とりあえずここで終えます。また、もっと詳しい、切り抜きメモも含んだ文に沿った逐一の対話のメモを書く機会があるかもしれません。

(追記)

広瀬さんはビデオの講演の中で、スウェーデンの環境活動家グレタ・トゥーンベリさんや斎藤幸平さんのことを、「精神・知的障害者」に対する差別語を使って罵倒していました

(註1)。一般的に公的な場で、差別語を使うと批判され、自らを貶めることとなります。ところが、昔から「それは、「障害者」差別語から離れて独自の意味として使われている」とか言い出すひとがいました。それに対する批判は、「「障害者」を指すことばとして消えているわけではなく、その差別的な概念を使って相手を貶めるために使っているから差別語であることに違いがない」として反論してきました。かつては苛酷な差別に曝されていることから差別糾弾闘争が発動されてきましたが、その中における総括や、今日「人権意識」がそれなりに波及する中で使われなくなってきましたが、それでも「精神・知的障害者」への差別語は、「人権意識をもっているひと」と言われるひとたちの中でも生きています。このことは、そのひとたちが依然として苛酷な差別の中で生きていくことにも示されています(註2)。そもそも差別と言うことは「社会にある差別意識を空気を吸うように取り込んでいる」という定理や、「社会」が意識を規定するという唯物史観的な考えから、糾弾闘争がほとんど発動されなくなっています。政治家や教育者の差別発言は、そもそも差別を煽り・煽動するひとへは、政治的に差別主義者として規定し対抗し、そのようなことはファシズムの隆起だと批判していくという意味での糾弾闘争の発動はありえるのですが。わたしがどうしても、分からないのは、なぜ差別的な発言をするひとが、どうして反原発運動の理論家でありえるのかという問題です。そもそも原発に反対するというのは、放射線がひとの命を奪い、奪う可能性が大きい、ひとを傷つけるものであるということでの反対ではないでしょうか？ それを確認できるのなら、差別発言は自ら律して抑え込むことです。

さて、わたしはビデオを見ながら広瀬さんが、障害問題に関する知識を持ち合わせていないから、差別語が使えるのかと思っていたのですが、そうでもないようです。この本の中ではっきりと「アスペルガー症候群」という言葉を使っています。

「スウェーデンの娘は、思考法に欠陥があるので、学校に行かずにストライキなんかしていたものだから、科学の知識がまったくない。医学的には、アスペルガー症候群と診断されたというが、「IPCCは正しい」と盲(ママ)(註3)信ずる一種の偏執狂(ママ)に育つらしい。・・・(中略)・・・(註4)この小さな教祖の最大の欠陥は、詐欺師集団IPCCの“嘘”を基に話し始めることにある。ところがこの靈感師は政治家を攻撃するのが好きで、政治的な売名行為で世界を煙に巻いたので、この新手の詐欺に引っかかる人間が続出し、一方で彼女を“アホ(ママ)娘”と呼ぶ人が世界中に続出したわけだ。問題は、この娘を裏で操る人形使いのIPCC集団～原子力グループのSF小説に、まともな大人が乗せられていることである。」(註5) 27-8P

さて、ここにある今世界的に観て、一番の宗派的な政治活動をしているのは、トランプ支持者です。

(註)

1 何のことが分からなくなるので、あえて指摘しますが、「バカ」とか「アホ」とか「狂っている」とか「頭がおかしい」とかいう言葉です(註6)。そもそも「市民運動」とか言われることは、エゴイズムのぶつけ合いではなく、社会にある矛盾を解決していく運動でもあるので、「意味なく」ひとを傷つけることを批判する立場です。従って、そのような言葉を使っていくことは、「運動家」としての自らの立場を危うくしていくこととなります。

2 日本では、強制入院や長期入院ということで、「精神障害者」への差別が、国連の人権委員会から繰り返し指摘・是正の勧告を受けてきました。それを日本政府は無視してきたのですが、それは、「精神障害者」への差別語が、「人権意識」をもっていると称されるというひとたちの間でもいまだに使われていることにも現れているのです。そのことをどうするのか、少なくとも反差別であるならば、自ら差別語の認識を深め使わないという姿勢を示していくことです。

3 この「(ママ)」という表現は、これが差別語であることを示す、それが差別的表現として差別を問題にするたちのあいだで承認されていますよ、ということを示す略記号です。こういう話は、差別するのを当然と思っているひとには通じません。ただし、そのようなひとは、「民主主義」や「人権」という言葉を使えなくなります。

4 この部分は、本人が移動するときに CO₂ を排出するものは（できるだけ）使わないようにしていることを、自分がそうしてもそれを支えるひとが使っていたら同じだというグレッタさんへの批判です。それならば、広瀬さんが原子力エネルギーを使わないとして、エネファームとかいうことに切り替えても、日常生活で使っているものが原子力で使われた電気を使って作られていたらどうなのでしょう？ しかも、電気に色は着いてはいないのです。それも自己矛盾で、同じようなことです。自分が批判していることが自分に返ってきます。

5 広瀬さんはピタゴラスの提言「汝よろしく沈黙せよ。さもなくば沈黙に優れることを言え」を引用されています。グレッタさんへの罵倒で、「アスペルガー症候群」ということどれだけの認識を持たれているのでしょうか？ 以下の話、「知的障害者」との切り離し的なことになってしまうので、躊躇しているのですが、広瀬さんがグレッタさんが理論的なことを理解し得ないひとだと、印象操作しようとしてるようなので、情報の問題としてあえて書き置きます。「アスペルガー症候群」と規定されるひとたちは、色んなひとがいるとは思いますが、かつてはエスパー（超能力者）のようにとらえられることがありました。広瀬さんは、宗教的なことを感じられているようなのですが、それは文化人類学的研究の中で、自然の中で生きる民の中で、「障害者」が「シャーマン」的にとらえられていたことに通じる事なのです。そもそも、「アスペルガー症候群」と規定されるひとたちの「特質」は、いくつかの映画の中でも取り上げられているのですが、認識において写真を撮ったように図として一瞬に認識するということが言われています。「特質」と言われることは、色んな分野で活躍しているひとたちの中で、現在のにとらえ返すと「アスペルガー症候群」のひとたちがいたのではないかとされています。また、科学の世界でも色んな発見・発明をした有名人の中にも、同様なのです。もうひとつの「特質」は、これは「アスペルガー症候群」と診断されるひとを含む「発達障害者」(註7)と規定されるひとたちの「特質」として、「役割期待——役割行」ということが「できない・不得手」と規定されるということがあります。これは医学モデルですが、それを批判する立場から、「忖度などしない」という突き出しもあります。安倍政治の森友問題で起きていた忖度で、まさに日本的文化なのです。必ずしも全否定することでもありませんが、文化の違いでそして、個々人の思想性が異なっていくということをとらえる必要があります。グレッタさんの政治家批判に、まさにそのことが現れています。というより、グレッタさんは、むしろ自ら「発達障害者」として

自らを突き出ししつつ、その「特質」とされることを逆手にとって、忸度しない批判を突き出しているのではないかとわたしには思えるのです。

6 話が脱線してしまうのですが、今後の論展開のための備忘録として、この註を付けておきます。差別語を使うということは、安倍元首相の常套する手法——「印象操作」のような意味ももっています。その手法は、麻生元副総理が学べといった「ナチスの手法」でもあるのです。それは、その差別語が指す被差別者に対する社会に広くある（共同主観的）差別意識に乗って、そのことばを投げかけるひとを貶めることなのです。もちろん、誰もが、そのような共同主観的意識にとらわれているわけではなく、現実に対一的なところや一对複数の相互主観的差別意識が存在するところで、その印象操作のようなことが起動します。よく、「その語は、特定のひとを指すということから離れて独自の意味をもっているから、差別語ではない」というような話をするひとがいるのですが、「特定のひと」を指す意味が消えているわけではなく、その語が相手を貶める意味をもっていることは否定しようがありません。少なくとも、反差別の立場に立つというひとは、差別語ということを使うのは、自らの立脚するところを否定することです。もちろん、民主主義とか、人権を否定するひとたちに、そんな話は通じないのですが、人権とか民主主義を否定してはならないということも、資本主義社会では共同主観的な意識としてかなり浸透しているので、自らの社会的地位を危うくさせることとして攻めていけることです。自民党右派のひとが、人権とか福祉の否定を、身内の会合で話しているのがインターネットのビデオで洩れ出てきていますが、それは、右派の相互主観的な場で通用するとしても、まさか、街頭演説で、すなわち共同主観的な場で、そんな話はしません。そんな話ができるのは、差別主義者の極右かファシストだけです。差別主義者はあぶりだし、少なくとも表の政治の場から、追放していくことです。

7 そもそも医学モデルの「発達障害」概念があいまいなままなのです。わたしは、「吃音者」当事者ですが、「吃音者」は長く「障害」規定されるのに「障害者手帳」がとれない、ということがありました。それが、「発達障害」規定のなかでとれるかもしれないというようになってきています。これ自体が「発達障害」概念の混乱とも言えることではないかとわたしは押さえています。長くなり、話しがどんどんそれていくので、また別のところで書きます。

さて、このようなことを書きながら、差別を指摘することの中で、それがきちんと提起しきれないと、運動の中で軋轢・混乱のようなむことを生み出してしまうのではないかと、そんなことを思ってしまうのです。何のために批判するのかということをも改めて考えつつ、この文章自体をどうするのかを考えています。これについては、「通信」の巻頭言でとりあげています。

たわしの読書メモ・・ブログ 628

・真鍋淑郎・アンソニー・J・ブロッコリー／増田耕一・安倍彩子監訳・宮本寿代訳『地球温暖化はなぜ起こるのか 気候モデルで探る 過去・現在・未来の地球』講談社（ブル

ーボックス) 2022

この本は、そもそも広瀬さんの講演のビデオから始まった、温暖化説批判と温暖化理論そのもののわたしの一連の学習の一応最後の学習です。真鍋さん（この本の表記には真鍋となっていますが、正確には眞鍋さんのようです）は、2021年のノーベル物理学賞の受賞者です。広瀬さんが「素人は専門家の話をちゃんと聞け」というところでは、まさに「温暖化説」を切り拓いていった専門家で、広瀬さんは「温暖化説」に賛同しているひととの対話を求めているのですが、対話をすべきなのはこのひとで、この本が出ているので、この本の批判を手始めに対話すればいいのです。それを、ノーベルがダイナマイトの発明で、それが戦争に使われたということで、そんな賞をけなして、対話をネグレクトしているようなのですが、そもそもノーベルは自分が発明したものが戦争で人殺しに使われたということの反省の上に立って、平和賞を含む科学技術の「正当な」発展を願ってこの賞を作ったという小学生でも知っている事実を隠蔽・ねじ曲げ、「印象操作」しているのです（註1）。

さて、元よりわたしは気象学的な、地球物理学的な基礎知識をもっていません。ですから、この本ブルーボックスというシリーズの入門書的な位置づけとはいえ、どこまでその学そのものを理解し得るか不安をもって読み始めたのですが、わたしとしては、むしろこの間学んできた、方法論的なところでの検証のようなことで、この本を読んでいました。

この本に書かれている真鍋さんがやろうとしていることと、この間の科学的検証問題とがわたしの中でリンクしていました。わたしにはコロナウィルスワクチンの副反応被害ということでの、厚生労働省の対応ということへの批判がありました。かつてから、政策として進めてきたことで被害が出て来たことに対して、政府系文書に「因果関係は立証されていない」とか「因果関係はない」という文言があったのですが、ここでもそういう言葉が使われ、そして「判断不能」ということで、ワクチンを推奨してきた責任を隠蔽しようとしているのではないかという疑義が膨らんでいたのです。TBSBS「報道1930」で、アメリカではコンピューターを使って、この厚生労働省が「判断不能」としていることの解析が始まっているという話が出ていました（註2）。この話と、真鍋さんの研究の方法論的な手法が同じようなことではないかと、考えていました。

それには、人工衛星によるマイクロ波の照射による地表・海水面の温度のデータや、数値モデルでの計算に、「世界一スーパーコンピューターを使った」（註3）という形容詞がつくような精力的な研究があったようです。

この本に書かれていることは、変数を探し出し、単純化した数式として関数を設定し、数値シミュレーションをして、実測値の数値とあっているかどうかを検証し、乖離があれば再度数値シミュレーションをやって、条件——より多くの変数を設定し、現実に出てきている数値に近い関数を見出していき、それを繰り返しながら、より精密な関数を探し出す方法のようなのです。まさにその手法による研究です。

その中身の検証、変数をきちんと網羅し得ているのかどうかとか、仮説について基礎知識がないわたしにはわかり得ません。そもそも、この本自体入門書的な位置づけがあるのに、専門知識がないと、そして参考文献を読み込んでいかないと、とうてい理解出来ないようになっていきます。ただ、方法論的なところで全体像をつかむ、変数がなんとなくでもつかめていくように目次をあげておきます（目次のレイアウトは変えています）。

目次

カラー図版

序文・謝辞

第1章 はじめに

温室効果

黒体放射とキルヒホフの法則

地球温暖化

第2章 初期の研究

熱を捉えて封じ込める大気

定量的な推定の始まり

シンプルな代替案

第3章 1次元モデル

放射対流平衡

CO₂の変化に対する応答

第4章 大循環モデル

UCLAモデル

GFDLモデル

年平均モデル

季節変化のあるモデル

第5章 初期の数値実験

極域での温暖化増幅

CO₂濃度倍増実験

入射太陽放射照度の変化

季節変化

第6章 気候感度

放射フィードバック

ケインファクターという循環

第2種フィードバック

(1)温度減率フィードバック

(2)水蒸気フィードバック

(3)アルベドフィードバック

(4)雲フィードバック

3次元モデルのフィードバック

第7章 氷期・間氷期の比較

地質学的痕跡

氷期と間氷期のコントラストのシミュレーション

第8章 気候変化における海洋の役割

海洋の熱慣性

大気・海洋結合モデル

初期条件づくりとフラックス調整
地球温暖化実験
大西洋
南大洋

第9章 寒冷な気候と海洋深層水の形成

第10章 地球の水循環はどう変わるか？

水循環の加速
数値実験
緯度方向の分析
河川流量
土壌水分
乾燥地域・半乾燥地域の乾燥化
大陸内部の夏の乾燥状態
これからどうなるのか？

あとがき

監訳者あとがき 阿部彩子・増田耕一

図版目次

参考文献

さくいん

さて、コロナウィルスの副反応でのコンピューターを使った解析という話とリンクさせていくと、この研究は現代科学の典型的な手法として展開されているのではないかと考えていました。近代知の地平からパラダイム転換された現代科学の方法論ではないかと思えるのです。広瀬さんの論攷を見ていると、どうも近代知的な方法論でとらえているので、対話が成立していないのではないかと思えるのです。

広瀬さんを支持しているらしいひとが、二酸化炭素は大気中の成分は僅かだから、二酸化炭素温暖化説は成り立たないというような批判をしているのですが、これは線形的な因果論的なところで問題を立てていて、二酸化炭素と他の成分が非線形の函数関連にあるということを押さえていないのではないかと考えています。実際に、真鍋さんらがやっているのは、二酸化炭素を2倍、4倍になったらどうなるのかの数値シミュレーションだとわたしは押さえています。

さて、の読書メモのひとつ前の広瀬さんの本の註で既に引用している廣松さんの文を引用したことに、そしてこの本との対話のなかで学んだパラダイム転換の中身を、さらに斜体文字でわたしなりの考えを書き加えて措こうと思っています。温暖化論へ、基礎知識がないところできちんと対話できないところに代えて、方法論的なところでの対話です。

それは、認識論的な射影においては従前の「主観—客観」図式に代えて四肢構造の範式となって現われ、存在論的な射影においては、対象界における「実体の第一次性」の了解に代えて「関係の第一次性」の対自化となって現われる。（これは論理の次元でいうならば、同一性を原基的とみ

る想定に対して差異性を根源的範疇に据えることを意味し、また成素的複合型に対して函数的聯関型の構制を立てる存在観となり、因果論的説明原理に対して相作論的記述原理を立てる所以となる。これは、因果論という線形的な函数に代えて非線形的な函数を措くことになる、言い換えれば、錯分子的・入れ小型の構造や函数内函数ということへの転換を意味する…… (略) …… (略) ……。この転換は、冒頭に書いた認識論における転換のみならず、物理学におけるニュートン力学から量子力学への転換、数学におけるユークリッド幾何学から非ユークリッド幾何学への転換、障害学における医学モデルから（「社会モデル」を経て、）関係モデルへの転換などなど、あらゆる学におけるパラダイム転換を意味している。

そこにおいては、いわゆる存在論的・認識論的・論理的諸契機が統一態をなしている。（元々は廣松渉『事的世界観への前哨—物象化論の認識論的=存在論的位相』勁草書房1975年「序文」ii Pに掲載されている文の一部を略して（「…… (略) ……」で表示）して掲載した文です。）

さて、広瀬さんは反原発運動に多大な貢献をなした理論家なのですが、温暖化説批判で、そのことの批判をしても反環境破壊運動で何の意味もなく（確かに理論的な混乱を回避するという意図はあるにせよ、それに決着をつけられないとすれば、自らが引用するピタゴラスの提言を受けて「沈黙」することであり）、むしろ運動的にとらえれば手を結ぶべき仲間の批判に踏み込んだことがどうも分からないのです。なんでそんなことをしようとしているのか分からないのです。

誤解のないように断っておきますが、わたしはコンピューター、ひいては科学そのものを過大評価しているわけではありません。そもそもプログラミングするのはひとりで、まさに、変数をどう見つけ出し、設定するのかというところが肝要なことで、そこからコンピューターを使った変数探しも出てくるのかもしれませんが。

(註)

1 広瀬さんは意図的（自覚的意識）でやっているとは思えないのですが、わたしはこの間政治の世界で行われてきた「印象操作」ということを想起してしまいました。これは安倍的手法と言い得ることです、答弁する側の安倍元首相が相手を批判するときの手法として「印象操作している」ということを突然言い出したことがありました。実はそういう安倍元首相自身が印象操作しようとしているのだということにわたしは気が付きました。日教組出身の議員に「日教組！日教組！」というヤジを飛ばしたりします。これは実は自民党が「日教組の偏向教育！」というステレオタイプ型の批判をしながら、実は自分たちが愛国心・国家主義教育という偏向教育をとり入れていった歴史の上に立った、印象操作なのです。安倍的手法は、もうひとつ「村度政治」ということもありました。実は、これも突然「官僚は村度などしませんよ」と答弁者に応答し、実は自分の政治が内閣人事局を創出しながら、村度政治を生み出していったことを、自ら暴露してしまったのです。

2 その番組の関係者が、厚生労働省に日本ではやらないのかという問い合わせに、「今後の検討課題です」というような応答があったようです。これは霞ヶ関用語（政府・官僚用語）では「やらない」という意味です。賠償しなければいけないことには取り組まないのです。

3 これは、ウィキペディアという対話型のオンライン辞書で真鍋さんを検索したときに出てきた文言です。ちなみに、広瀬さんはこのウィキペディアも批判しています。確かに、時の「共同主観的妥当性」として作られていくので、往々にして体制的なことに流されることもあるかも知れないのですが、対話型の辞書なので、まずは専門家との対話で批判しきることが必要かも知れませんが、徹底して対話——批判していけば良い話です。

映像鑑賞メモ

たわしの映像鑑賞メモ 074

・広瀬隆講演録集編ビデオ「二酸化炭素 CO₂によって地球が温暖化しているという説は科学的にまったく根拠がないデマである」2022 in 東京水道橋東京学院他

「広瀬さんは反原発の市民運動の中で、その理論的なところでいろいろ本を出していて、わたしも何冊か読んでいます。」とわたしはこのメモを書き始めました。後でこのこと自体に疑問を感じるようになったのですが、・・・。

このビデオの論点の軸は、二酸化炭素地球温暖化説批判ですが、これについてはビデオの中で紹介されていた本について、「たわしの読書メモ・ブログ 169 / ・広瀬隆『二酸化炭素温暖化説の崩壊』集英社(集英社新書)2010」で、読書メモを残しています。(「反障害通信」29号所収 <http://www.taica.info/adsnews-29.pdf>)

かの本がでたのが、フクシマ原発震災前でした。まだ自然エネルギーが圧倒的に押され、現実的に原発か化石燃料も使わざるをえないという時代で、原発批判のために化石燃料を技術的に向上しながら利用するのだという主張をせざるをえない事情もあったのでしょうが、著者はエネファームという技術を押していました。まだ、議論は冷静に進んでいました。わたしも疑問をぶつける風のメモを書きました。

さて、このビデオでの広瀬さんの主張には、さらに疑問がふくらんでいきます。

何故、地球温暖化説を敵視するのか？

まず、地球温暖化自体を「疑問」ではなく、はっきり否定にまで踏み込んでいます。このビデオの中で、ドットの寄せ集めの図や、棒グラフの図を出して説明していて、「気温がさがっている」という主張をしているのですが、確かに上がっているところと下がっているところがあります。ひいて俯瞰図的に見ると、右肩あがりになっています。SNSを見ているとひとによっては上がったりがったりしていた、どっちとも言えないということも出ていますが、温暖化説をいろいろ項目をあげて批判しているひとの中には、いろいろ修正をほどこして、直近では30年で0.2度100年で0.7度あがっている数字が出ています(註1)。

結局、これを「僅かしかあがっていない」ととらえ、関係ないといえるかどうかです。

もうひとつ書いておくと、運動をしているひとたちは、過去の「被害は僅か」ということの批判をしてきました。放射線汚染水を海に流す話も、小児甲状腺癌の話も、そして過去の公害ということで、チッソの水銀を放出しても海水で薄められるから大丈夫と言っていたのに、類をみない被害になったことなど、・・・(註2)。広瀬さんは、かつて氷河期

がきているから温暖化は関係ないと言っていると広瀬さんの発言を引用した文を読んだりしていましたが、この講演のビデオではその話が出てこず、「地球物理学的なことは分からない」という話が出ています。そもそもグラフの中で、「寒冷期」と言うひとがいるところを「小氷期」とも書いているのですが、氷河期の話にリンクするようなことをするのなら、そもそも「すでに氷河期に入っている」という発言をしたことを現代的にどうとらえるのか、ということが必要になります。そういう太陽と地球の関係という話になると、ほとんどひとがどうこうできることではないので、トランプ支持者には陰謀論的なことを信ずるキリスト教右派的カルト集団のように、「神のおぼしめしのままに」となるのでしょうか？

(註3) そもそも、わたしたちに何ができるかという、運動的観点で話をしていると思っていたのですが、そんな話ではなくなります。

「トランプはいろいろひどいことをしたけど、地球温暖化説は誤りだと言ったのは正しい」という発言まで出ていたのですが、トランプは地球物理学的観点から「温暖化説は誤りだ」と言ったのでしょうか？彼の常套手段は「フェイク」ということばで相手を攻撃し、自分の支持者を固め・さらにその世界にひきずりこんでいくことです。たいていは、「フェイク」といっている彼の発言自体がフェイクでフェイクをまき散らしているのです(註4)。彼はカルト的陰謀論を持ち出す人たちに支えられてアメリカの分断の政治を作り出しました。陰謀論などが持ち出されるとき、分断の政治がでてくるのです。広瀬さんは、IPCC(気候変動に関する政府間パネル)とIAEA(国際原子力機関 International Atomic Energy Agency の略称)の結託ということを講演のなかで話していました。具体的内容を語っていません。ちゃんと内容を展開していかないトランプ的な陰謀論になってしまいます。

わたしは、反原発運動を反・環境破壊-運動の中に位置づけています。今、反-環境破壊-運動は、若いひとの中で、気候変動問題で盛り上がりを見せています。そもそも、反原発運動に寄り添う理論を構築してきたひととと思っていたひとが、なぜ、反-環境破壊-運動というところで連帯を求める運動として位置づけないで、運動を分断する、仲間とすべき運動を叩くようなことをするのか分かりません。

勿論、論理的におかしい運動をしていたのでは、運動が自壊していきます。そういう意味で、きちんと是正する提起をしていく必要性は理解し得ます。ところが、広瀬さん自身が「地球物理学的なところから温暖化問題は分からない」ということも言っています。どうみても、決着がつくとは思えません。

自然エネルギー批判

さて、そもそも、原発か化石燃料かという二者択一的に問題が設定されていて、原発の方が危険だから、化石燃料を擁護するために、温暖化説を批判する必要に迫られて批判するというなら、まだ問題は理解し得るのです。しかし、自然エネルギーという選択肢が膨らんできているのです。

そのことで論点のすり替えをしています。広瀬さんは、化石燃料の弊害を克服する技術が出てきているとしています。で、一方で、自然エネルギーの弊害のいくつか指摘されては来ています。ただ、こちらもの技術も日々更新されています。そしてメガではない地産地消の自然エネルギー施設とかも提起されています。自分が支持することの技術の刷新を

とりあげ、自然エネルギーの技術の更新を無視しています。あまりにも、自分の志向性に都合の良いように論理をねじ曲げている、「我田引水」という論理になっているとしか思えないのです。

話し合いの前提を確立すること

さて、広瀬さんは、地球温暖化説を唱えるひとと徹底した議論をしようよと呼びかけています。で、応えようとしないと批判しています。ですが、相手を間違えています。斎藤幸平さんの名前を何度も出していますが、彼は地球物理学や環境学を専門にして論を展開しているわけではないと思います。少しは環境学的なところで勉強しているかも知れませんが、彼は経済学から、『資本論』を読み込み経済成長という幻想批判を展開しているひとです。

広瀬さんは、「素人はプロの言うことを聞くべきだ」ということを話していました。わたしは「プロ」も素人の提言をちゃんと聞くことだと思いますし、そもそも「プロ」が「素人」にも分かるように説明をすべきことだと思います。そして、「プロ」というのは、多分に期待を込めて書いているのですが、自分がわからないことがまだまだたくさんあるということを知っているひとで、「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という姿勢を示すひとだと思います。

反原発の原子力工学の専門家と言われるひとには、そのような姿勢のひとがたくさんいます。高木仁三郎さんのように専門家から、「市民運動家」というように突き出していったひともあります。

さて、広瀬さん自身が、「プロ」のひとの名をあげています。ノーヘル物理学賞を受賞した眞鍋淑郎さんです。広瀬さんもプロを自認されているのですよね。専門外のひとが専門家の知識を取り入れて、論を展開しているひとを批判するより、「プロ」の同士で論争相手にして相互批判したらどうでしょう？ どうも、ノーベル賞をとったということ、ノーベルの財団は兵器財団とかいって批判しているのですが、ノーベルは自分の作ったものがひと殺しに使われたということでの贖罪の意味を込めてノーベル賞をつくったのであって、ノーベル賞自体が汚れた賞ではないと思います。これはおかしい「印象操作」の類いです。「数式を使った論文」というようなことも批判的ニュアンスをもって言っていたのですが、確かに「素人にも分かるような説明」ということでは、数式を使った説明は理解の障害になるかもしれませんが、「数学は自然科学の言語である」という提言からすれば、「プロ」同士の議論では数式は有効だと思います。

さて、自分是对話を呼びかけているのに、出てこないという批判をされています。わたしは、かつて、「対話」と設定された場のビデオを見たことがあります。橋下大阪市長（当事）が桜井誠在特会代表と大阪市庁舎でマスコミを入れた公開の討論集会を開いたのですが、お互いに「てめえ」とか言い合う、とても「対話」にならない集会でした。

広瀬さんは今回のビデオの中で、相手を「知的障害者」や「精神障害者」への差別語を使って罵倒しています。対話のルールに疑問を感じるひとと対話しようとしてくるひとがいるのでしょうか？

さて、広瀬さんはグレタ・トゥーンベリさんのことも「おかしいひと」というような批判をしています。彼女は、「発達障害」と規定されているひとです。そのことは彼女のこと

を知っているひとは大体知っていることです。広瀬さんは知らなかったのでしょうか？ 彼女自身は、むしろ「障害の否定性」を反転させて活動していますが、多くの「発達障害者」が「おかしなひと」というレッテルを貼られて、「おかしいひと」というような言葉は「トラウマ」になっています。わたしは「吃音者」と規定される「言語障害者」ですが、「吃音者」の中には「発達障害者」として「障害者手帳」をもっていて、「発達障害者」としての運動を進めようとしているひともいます（註5）。

かつては、他者を意味なく傷つけてはいけないということが、運動をするひとの中にあっただと思うのですが、そういうことは崩壊してしまったのでしょうか？

資本主義の賛美？

広瀬さんは温暖化説批判をする中で、結局化石燃料の擁護的に陥り、科学賛美的なことも言いだし、結局資本主義賛美になってしまっているのではとわたしにはとらえられるのです。資本主義の「今だけ、ここだけ、自分だけ」という論理、それはトランプの経済優先の論理が環境保護のための規制を敵視した、アメリカファーストやトランプファーストの論理として様々な矛盾と分断となって現れてきているとわたしは押さえています。トランプ政権成立直前のアメリカ中南部の石油会社とつるんだ共和党知事政権下での石油の流出という環境破壊を引き起こしてきた事件をルポした本が出ました（「たわしの読書メモ・・ブログ 523 / ・A.R.ホックシールド/布施 由紀子訳『壁の向こうの住人たち——アメリカの右派を覆う怒りと嘆き』岩波書店 2018」。参照）（「反障害通信」88号所収 <http://www.taica.info/adsnews-88.pdf>）。これを読んでいると、そもそも化石燃料の採掘自体にも疑問を感じます。

さらに石油から作った製品の問題もでてきます。自然にないものを作ったとき、それをどう環境に負荷を与えるのか、どう処理するのかということをきちんと示し、示せないものは作ってはならない、とすることです。これはまさに原発にも当てはまることです。

広瀬さんはアフリカに気象の記録などないという話の中で（註6）、「土人」発言までされていきました。科学賛美——資本主義賛美が、「帝国主義者」の論理、植民地者の論理とリンクしていきます。「野蛮の文明化」ということで、植民地からの収奪を合理化していった論理を広瀬さんはどうとらえるのでしょうか？ 利益のためには、現実的被害や危険も顧みないということ、原発を批判してきたのではないのでしょうか？ いったい、広瀬さんが何故原発に反対してきたのか、しているのかわたしには分からなくなりました。

何のために議論するのか

さて、わたしは広瀬さんが何故、地球温暖化説批判をしているのか分かりません。前述したように、論理的に破綻していることが明らかになるのなら、反・環境破壊・運動の桎梏になることです。ですが、結論がでそうにはありません。そもそも、反・環境破壊・運動ということでは、今若いひとが取り組んでいて、運動全体の軸になっているとも思えますし、そのひとたちが反原発運動の否定的批判をしているわけではありません。わたしたちが対峙しているのは、資本の利益のために、ひとの命をないがしろにして、危険を鑑みないで、環境破壊的なことを進めるひとたちで、地球温暖化問題にとり組んでいるひとたちは敵ではないのです。そのひとたちの理論に疑問があるのなら、連帯の運動内部で議論を深化させていく事です。まるで、主要敵のように叩くような批判をしていることは、自分たちの

運動の障害にもなっています。

さて、「ひとの振り見て我が振り直せ」とか、反面教師とか言う言葉もあります。わたし自身も議論を始めると、自分の理論の正当性を主張するというようなところで、熱くなってしまうことがあります。ですが、改めて何のために議論をするのか、わたしは、ひとの命をないがしろにして進める危険な原発をなくしたい、そしてひとのいのちと生きる基盤を壊す環境破壊を許さないというところで、他の環境破壊を許さない運動を進めている、そして、ひとの命奪い、傷つけるあらゆる差別を許さないというところで連帯していく運動を進めていきたい、行動していきたいと思っています。

(註)

[1 地球温暖化のファクトフルネス：シロクマは絶滅の危機か？ | キヤノングローバル戦略研究所 \(cigs.canon\) \(註7\)](#)

そもそも温暖化「そのもの」というか「核心」ともいえることで、CO₂などの温室ガスによる温暖化の問題があります。このデータを出しているひとは都市化による温暖化を区別して下方修正していますが、温暖化という事態があるのかどうかを見るのに都市化による下方修正をする必要はないと思えるのです。したがって、温暖化そのものは、日本では、100年で「1.1~1.2℃程度」となります。

2 わたしは、そもそも、被害を語る時政府の資料を見ると、往々にして「被害と指摘されることとの因果関係は立証されていない」という、因果論を使っているのですが、わたしは因果論というのは古い科学知で、厳密に論を立てるときには使えなくなると思っています。例えば、コロナウィルスワクチンの副反応の検証の話があります。一時期わたしはこのことを厚生労働省のホームページで追っていたのですが、「ワクチン接種後の死者」が、コロナでの死者6%を超えていました。それを「因果関係不明」とか「判定不能」ということで、ワクチンとの関係性を分析することを止めていました。マスコミはほとんどワクチンを推奨するのみでこの副反応についてほとんど報道していませんが、BSTBS1930で、この「判定不能」としたことをアメリカではコンピューターを使って検証する作業が始まっているというニュースを流していました。要するに、変数を探し出して、函数的関数 (註8) で方程式を試論的に作って行く作業なのだと言えらるのではと思います。因果論というのは $f(x) = ax + b$ の世界ですが、そんな単純ことはほとんど起きてこないで、 $f(x, y, z, \dots)$ という関数の方程式を探し出す作業なのだと言えらることで。

3 カルト集団の非論理の話は、そもそも哲学で「神は死んだ」と宣言しているのですが、そこから話をしていくしかないのですが、そもそも信仰問題は論理ではないので、論理の話は通じません。そのカルト的話からする陰謀論との対話は不可能になり、分断しかもたらしません。

4 こういう手法はトランプ元大統領と世界的に唯一話せる首脳としてあげられていた安倍元首相の手法で、たとえば、森友学園のお友達不正優遇事件で、そんな言葉で追及されていないのに「官僚は忖度などしませんよ」と言ってその年の流行語大賞候補に「忖度」という言葉がとりあげられました。逆に、そうか内閣人事局など作ったのは「忖度政治を造り上げる」ためだったのかという類推が起きました。その「忖度政治」で官僚から自死

者までも出たのに、虚偽答弁を 118 回も繰り返していました。きちんと追及されないままでした。もう一つの、言葉があります。「印象操作している」(註 9)という言葉です。これは、答弁席からヤジをとばし、相手の質問に答えないで、中味のない相手を攻撃する、トランプのフェイクと同じような意図をもった言葉です。実は、印象操作を自分も繰り返していたのです。ヤジがまさにそのようなことでした。これらのことは、わたしの中で、麻生太郎元副総理の「ナチの手法に学ぶ」ということにもつながっていきます。

5 わたしは、「発達障害」という概念自体が医学モデルで、その他いろんな観点から、そのような主張には批判的です。

6 わたしは農や漁業、狩りで暮らす民には民間伝承のようなことがあって、むしろ気候変動には敏感な面もあるのだと思っています。桜の開花時期が年々早まっている、という「庶民感覚」は間違っているのでしょうか？

7 ホームページを貼りつけておきます。これは温暖化説批判の論攷ですが、「温暖化は起きていない」という話にはなっていません。気温上昇は起きているけど、その上がり幅は小さいという話です。問題はそれを小さいと切り捨てていいのかという話と、それからその延長線上の将来の予測です。それについては書かれていません。

[地球温暖化のファクトフルネス：シロクマは絶滅の危機か？ | キヤノングローバル戦略研究所 \(cigs.canon\)](https://cigs.canon/)

こういったデータを分かり易く地球温暖化ファクトシートとして 17 項目にまとめた。まだアゴラで紹介していないものも多くあるので、ぜひご覧頂きたい。

1. 台風は増えていない
2. 台風は強くなっていない
3. 超強力な台風は来なくなった
4. 温暖化は 30 年間で僅か 0.2°C
5. 猛暑は温暖化のせいではない
6. 短時間の豪雨は温暖化のせいではない
7. 豪雨は温暖化のせいではない
8. 再生可能エネルギーの大量導入で豪雨は 3 ミクロンも減らなかった
9. 2050 年 CO2 ゼロでも気温は 01°C も下がらず、豪雨は 1 ミリも減らない
10. 温暖化で死亡リスクは減少する
11. 東京は 3°C 上昇したが繁栄している
12. 山火事は温暖化のせいではない
13. 海面上昇は僅かでゆっくりだった
14. シロクマは増えている
15. 砂浜の消失は温暖化のせいではない
16. サンゴ礁は海面上昇で沈まない
17. エゾシカの獣害は温暖化のせいではない

観測データを見る限り、地球温暖化による被害は殆ど起きていない。

報道では何か災害があるたびに「温暖化の影響がある」と結ばれることが多い。

だが影響は量として把握しないと認識を誤る。定量的には温暖化の影響は「ごく僅か」であり、「温暖化のせいではない」と言った方が正確なものばかりだ。

解説 地球温暖化は、起きているといっても、ごく緩やかなペースである。日本においては、気象庁発表で 100 年あたり 1.1~1.2°C 程度である。但し、東北大学近藤純正名誉教授によれば、気象庁発表には都市化等の影響が混入していて、それを補正すると 100 年あたり 0.7°C 程度であるとされる (図 4)。100 年あたり 0.7°C とすると、子供が大人になる 30 年間程度の期間であれば 0.2°C 程度となる。0.2°C と言えば体感できるような温度差ではない。なお都市化等の補正の方法について、専門的な解説は近藤純正 HP を 6、平易な解説は筆者によるものを参照されたい 7。

8 このような言葉はわたしが使いはじめた言葉ではありません。日本のマルクスの流れから出てきた哲学者で自らの新しい地平を生み出している廣松渉さんの言葉です。「函数的関関」の言葉自体は新カント派にまでさかのぼることができるのですが、廣松さんはそれを自らの哲学のパラダイム転換の中で位置づけ直しています。

9 広瀬さんはシロクマの数が減っているという地球温暖化説を主張する一部のひとがとり上げていることを、このビデオの中で批判しています。ですが、きちんと批判しないと結果的に「印象操作」になってしまいます。シロクマは保護活動が起きシロクマの狩猟を禁止したこともあって、頭数が増えているので、もしそれをしなかったらどうなっていたのか、という予想をたてて、地球温暖化による影響としてかたることができるかもしれませんが、そもそも (註 2) で書いているように、シロクマの頭数の増加に関する函数関関の方程式の変数がたくさんあり、しかも、函数内函数 (入れ子型構造とか錯分子構造) (註 8) とかもでてくることで、因果論的な発想で語るなどできないと言ええることです。

(編集後記)

◆ 7月8月は、原稿が溜まり、また原稿が時勢と乖離していったので、月二発刊の臨時態勢にしています。編集の作業が重なるのですが◆にちょっときついのですが、何とかやりきれそうです。今回は、反原発運動内部で起きている地球温暖化説をめぐる論争の特集のようなことです。そもそも運動という観点からすると、なぜ、「温暖化説」とりわけ「CO₂温暖化説」を批判しているのか分からないのです。

◆ 巻頭言は、映像鑑賞メモのビデオを観て、さらに、読書メモの本を読んで、メモを書き上げたところで、「編集後記」前項で、そもそも「何ために」というところと、そもそも日本における議論の貧困状況やさらに、嘘やごまかしの政治に右に倣いしてきた状況を押さえ、「何のための議論か」ということをはっきりさせたところでの議論を、という提起です。

◆ 読書メモは、温暖化説批判の論攷を二つ、そして温暖化説の入門的な論攷、そして「CO₂温暖化説」の本家本元らしい真鍋淑郎さんの本をとりあげました。

◆ 映像鑑賞メモは、そもそもこの一連の学習をすることになった広瀬さんのビデオの鑑賞

メモです。ビデオがかなりの量あるようなのです。これは総集編と名を打ったビデオです。実は、反原発の集会で、「CO₂ 温暖化説」の批判が出ていて、ビラにも書かれています。その中で、「広瀬さんの理論にはくわず嫌いのひとがいるけれど、ぜひ観て、読んでください」という話が出ていたのですが、わたしは障害問題を軸に反差別論をやってきたので、講演で差別語を連発するようなひとの講演には、差別糾弾闘争を発動するところで参加するのではない限り、参加出来はしないのです。それに余りにも非論理的な話を聞いていると、批判のコメントをせざるをえなくなります。「食わず嫌い」ということで、書かなら、食中毒をおこすようなものは始めから口にはしません。現実には混乱が起きているようなので、その問題の所在を確かめるために、ビデオを観て、本も読みました。

◆ですが、文を当事者に見せて混乱解決できるだろうかと考えています。

余計混乱が増すだけになるかもしれません。どうするか迷っています。とりあえず、文だけは書き上げました。

◆ひとつひとつ、独立した文として書いていたので、他の論攷とかなり重複した文の掲載になってしまっています。あえてそのままにしています。

◆今回は、8月18日発刊です。

反障害－反差別研究会

■会の方針

「障害学において、「障害とは何か」という突き詰めがなされないまま、議論の煮詰めもなされないままでした。そこから起きる混乱が、「障害者運動」の方向性を見出していく作業を妨げていました。イギリス障害学が障害の医学モデルから「社会モデル」への転換をなそうとしました。しかし、もう一段掘り下げた作業をなしえぬまま、医学モデルへの舞い戻りという事態が起きているようです。また、各国で差別禁止法とか「解消法」が作られています。そこでのモデルは結局医学モデルでしかない状態です。この「会」でやろうとしている議論・研究は、障害問題を解決していくための「障害者運動」のための理論形成の作業です。「会」としては「社会モデル」から更に、関係モデルへの転換を提起しています。実は、日本の「障害者」の間では、既にこの議論を先取りするような議論もなされていました。そのことが整理されないままになっています。改めてそれらのこともとらえ返しなが、議論をすすめて行きたいとも思っています。また、障害と差別はかなり重なる概念です。他の反差別運動の中での議論や認識論的議論も織り込みながら、議論を進め理論形成していきます。そして、「差別はなくなる」とか「社会の基本構造は変わらない」という意識が、今のこの社会を覆っていきます。そういう中で、今の社会の枠組みに限定した議論になっていき、そのことが論の深化を妨げる事態も生じています。だから、過去の社会を変えようという運動の総括も必要になっています。そのことにも、差別ということをキー概念としながら議論・深化していきたいと考えています。(文責 三村)

■連絡・アクセス先

E メール hiro3.ads@ac.auone-net.jp (三村洋明)

反障害一反差別研究会 HP アドレス <http://www.taica.info/>

「反障害通信」一覧 <http://www.taica.info/kh.html>

反差別資料室 C <https://hiro3ads6.wixsite.com/adsshr-3>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

反差別資料室 A <https://hiro3ads6.wixsite.com/adshr1>